

ユニットアクターズ公演台本

ホワイト 〜この冬を越えたら〜

作／萬野 展 演出／早矢仕裕之

主要登場人物

村上 逸治 30才。滝川組・工事事務所長。
野呂川清司 42才。滝川組・技師。村上の上の先輩格。
黒川 貞夫 24才。滝川組・技師。
飯室 秀実 25才。日本電力・技師。
佐野 光夫 26才。医師。
新庄 巖 37才。人夫頭。人夫に信望が篤い。
戸田 幸市 32才。人夫。神奈川県出身。殺人犯。
辻 礼二郎 25才。人夫。山口県出身。
別所 毅 29才。人夫。群馬県出身。
岩田 精治 32才。国家警察神奈川県警捜査一課・警部補。
三人の若い囚人

シーン1 1970年／東京拘置所／初雪

遠くでサイレンが鳴っている。
薄闇のなかに、ひとりの老人がいる。
生死も定かでない、ミイラのような風貌。
囚人服のような質素な服を着ている。
同じような服を着た三人の若い囚人たちが登場。
こっそり老人の背後に近づく。

囚人たち セーの：

囚人たち、手にしたクラッカーを一齐に鳴らす。

囚人たち おめでとう！ じつちゃん！（騒ぐ）

老人、微動だにせず、やがてパタンと横倒しになる。

囚人たち うわ…おい、やばいよ！

囚人1 戸田さあん！

囚人2 戸田さん、しつかり！

囚人3 気を確かに！

囚人たち、慌てて老人を助け起こす。
戸田老人、座り直す。

囚人1 脅かさないで下さいよ…。

囚人2 戸田さんにぼっくり逝かれちゃったらシャレになんないっすよ。

囚人3 俺たち、いきなり殺人犯じゃないすか。

囚人2 しかも凶器クラッカー三ヶ。

囚人3 サマになんないよなあ。

囚人2 俺たちこれでも政治犯なんすから。

囚人3 革命戦士なんすから。

囚人1 オイ。

囚人2 ああ、そうだ、そんなことより…。

囚人たち、居住まいを直す。

囚人1 戸田さん。

囚人たち 出所、おめでとうございます。

囚人1 ホント、戸田さんにはお世話になりました。俺たちが入所以来、半年無事に
過ごせたのも、名主の戸田さんが目をかけてくれたおかげです。

囚人2 すごかったすよ。戸田さんの力は。なあ。

囚人3 もう全身入れ墨耳なし芳一状態のヤーさんとか、片目が宝石になってる中国
人とか、最初来たときは、もう、あ、俺は死んだと思っただもん。

囚人2 戸田さんの名前出せば、それがみんな親切にしてくれるんだから、凄いですよ。

囚人3 渋いっす。

囚人3 感動っす。

戸田 …ただ長くいたというだけじゃよ。

囚人1 二十年…ですよね。

囚人2 想像もつかないよなあ。

囚人3 それもあと一時間で終わりじゃないすか。

囚人2 こういうとき、なんて云うんだっけ。

囚人3 あれだよ、ホラ、日活映画でやってたろ…。お、お…

囚人2 おりづめ？

囚人3 おきよめ？

囚人1 おつとめ？

囚人2 それ。おつとめ。

囚人たち、再度居住まいを正す。

囚人たち 永のおつとめ、ご苦労さまでした！

戸田 …外は…。

囚人1 は？

戸田 外は天気かのう。

囚人1 外は天気か？

囚人2 天気か？

囚人3 (窓の外を見てくる) ちらほら、雪が。

囚人2 ちらほら雪が。

囚人1 雪が。

戸田 …そうか。…初雪じゃな。…十一月…十日…。

囚人1 十一月、十日。

囚人2 十一月、十日。

囚人3 十一月…十一月？ 今日って十一月？

囚人2 今日って十一月？

囚人1 いや。

囚人3 十二月だよ。雪降ってんだよ。

囚人2 殿、十二月にございます。

囚人1 誰が殿だ。

戸田 …山の初雪は早い。あのとき、今でもはっきり覚えとる…昭和十二年十一月十日。二日。谷に初雪が舞った…。

戸田老人、鉄格子の外に目を向ける。
その目は遠い過去を見ているようだ。
暗転。

シーン2 1938年／越冬隊／刑事

黒部ダム第三発電所第一工区。工事事務所。
日本電力技師・飯室と滝川組工事事務所長・村上が睨み合っている。
そこへ人夫頭・新庄と滝川組技師・野呂川、会話しながら登場。

野呂川 ……じゃあ下山の準備は任せたから、人夫たちを組分けしておいてくれ。
新庄 わかりやした。

野呂川 今週中に頼む。来週中には全員降ろす。新さんと俺は最後の組だ。

新庄 へい。

野呂川 もう富山側じゃ初雪が降った、急がんと…

村上がたまりかねたように沈黙を破る。

村上 だからそんなことはできんと云ってるでしょう！

飯室 村上さん、まあそう興奮しないで。

村上 あなたの云ってることは、理屈だ。現場の判断は違う。

飯室 しかしね、村上さん、これは私が云うんじゃない、日電の本社が云うんです、誤解しないでもらいたいのが…この工区の進捗は、これは悪い。お話にならないくらい悪い。これは事実だ。

村上 それは数字はそうでしょう。だが…

飯室 だがその数字を見て、本社は判断をする。滝川組じゃ無理なんじゃないか…

村上 うちが無理ならどこでも無理です。

飯室 ああ、それはそうでしょうね。おたくはこの手のダム工事では最も実績がある。私も技師のはしくれとして、それはわかっていますとも。

村上 それならこの工事の難しさもわかって貰えるでしょう。飯室さん、ここは普通の場所とは違う。なにもかもが違う。時間をかけて探り探り進めていかなきゃならないんです。

飯室 その時間がないんですなあ。

村上 だからといって他にまわしても同じことですよ。

飯室 それはまあね。ただ本社はそうは思っていない…

村上 下の連中になにが判るんだ！

野呂川 ……ムラさん。

声を荒げる村上をたしなめるように、野呂川が静かに声をかける。
役職のうえでは村上が上だが、野呂川は年上。
経験豊富な技師で、村上が入社当時世話になった先輩でもある。

村上 ……いや…失礼。

飯室 いいえ、とんでもない。

村上 とにかく、もう少し時間をください。状況は報告書にまとめてある。それを見ただけで…

飯室 残念ですが、その上での判断なんです。来年早々には決定されるでしょう。本社じゃすでに後釜をどこにするかで、入札の準備をしてる。

村上 来年…

飯室 今日、けやきだら檜平で初雪が降ったそうです。もう他の工区では下山が始まっている。いったん雪に見舞われれば、来年の雪解けまでこの山には誰も近寄れない。挽回のチャンスはない。…お気の毒ですが。

村上 …。

飯室 ま、お気を落とさずに…。下山まで、なにかとお手伝いさせてもらいますよ。
(新庄に) 最終組に入れといて下さい。…それじゃ。

飯室、退場。

村上、野呂川、新庄、沈黙の中に残る。

村上 …野呂川さん。

野呂川 …。

村上 越冬隊を組織してください。

野呂川 …。

村上 工事継続に必要な人員を確保し、我々はこの冬、ここにどどまってトンネルを掘ります。

野呂川 …本気ですか。

村上 お願います。

野呂川 食糧が保ちませんな。

村上 一冬越せるだけでいいんです。必要最小限でいい。現存の食糧で賄える人数だけ残しましょう。足りませんか？

野呂川 それならまあ、なんとかなるでしょう。

村上 ではお願いします。越冬隊以外の下山は来週末には終わらせて下さい。

野呂川 …新さん、聞いた通りだ。人選は俺もやるが、新さんも一練りしてくれろ。メンツが固まったら、人夫たちの意向を聞かないとな。

新庄 あのう、誰も残らんですよ。

村上 …どうしてかな？

新庄 …。

野呂川 いいよ、新さん、何でも云ってくれ。

新庄 この山あ、冬、人間がおれるようなところじゃないです。…生きられんよ。

村上 …。

野呂川 人夫の中には、迷信深いのも大勢います。そんな連中は、この山は普通の山じゃない、いつまでも人が騒ぐと天から罰が下るなんて云ってますよ。まして冬を越すととなると…。

村上 三倍にします。

野呂川 …。

村上 賃金は通常の三倍だ。

新庄 …。

村上 それでも残らないかね。

新庄 …まあ、それなら、心動かすやつがおらんとも限らん…。

村上 頼むよ、新庄さん。

新庄 へえ…。

野呂川 じゃあその条件で、とにかく人選して、表にしておいてくれ。

新庄 へい。

新庄、退場しかける。

村上 ……新庄さん。

新庄 はあ。

村上 越冬隊は、なるべくひとり者、家庭があっても子供のいない者を中心にしてくれ。

新庄 はあ…ですが…

野呂川 ムラさん、そいつは無理だ。経験のある者も少しは残さないと…

村上 必要なのは技術より冬を越せるだけの体力と気力です。私とノロさんがいれば、技術的なことはなんとかなる。新庄さん、頼んだよ。

新庄 へえ。

新庄、退場。

野呂川 ……

村上 ……間違ってますか？

野呂川 それは私の決めることじゃない。所長はあんただ。

村上 滝川がケツをまくるわけにはいかない。ここで逃げたら笑いものだ。

野呂川 意地だけでトンネルは掘れんぞ、ムラさん。

村上 ……

野呂川 わかつてるだろうが、一号トンネルはあれ以上は掘れない。今はなんとかなくても、いずれ駄目になる。

村上 不可能を可能にするのがわれわれの仕事でしょう。十年前、ひよっこだった私にそう教えたのはノロさんだ。

野呂川 ……

村上 日本電力は黒部に社運をかけてます。国も後押ししている。第三発電所が完成すればそこから八万八千キロワットの電力が得られる。国家規模の大事業です。そこからはずされることは滝川組にとっても大きな損失なんです。

野呂川 難しいことはわからん。そんなことは会社の上の人間が考えることじゃないかね。おれたちはただ、掘れるか掘れないか、どうやったら掘れるのか、それさえ考えていればいい…おれはトンネル屋だよ、ムラさん。あんたは違うのかね。

村上 ……私だってそうです。だからここに残るんです。ノロさん、お願いします。私に力を貸してください。

野呂川 貸すも貸さないもないよ。(村上を指して)親方は掘ると云ってる。だつたら掘るさ。…なに、どこかに手だてはある。不可能を可能にする手だてが…

村上 はい。

野呂川 クロが必要だ…呼び戻しておいてよかった。

村上 黒川くんは戻って来るんですか。

野呂川 妹の結婚式が済みしたい戻ると云っていたよ。どうせすぐ下山だからいいと。いったんだが、律儀なやつだ。帰ってきたら驚くだろう。

村上 そうですか。

野呂川 やつは優秀だ。なにか考え出すかもしれん。入社当時のムラさんに似てるな。

村上 彼は確か長男でしたね…。

野呂川 そうだ。

村上 …。

野呂川 大将がそんな顔していると志気に関わるぞ。さあ、仕事だ。

野呂川、退場。

村上、しばしとどまって窓から秋の深まった黒部山塊の稜線を、見渡す。
夕暮れが迫っている。

村上、退場。

場転。

黒部溪谷上流、日電歩道。

険しい崖の道を、ふたりの男が歩いている。

滝川組技師・黒川と国家警察警部補・岩田である。

岩田 (バランスを崩す) うわっ…たっ…とっ…。

黒川 危ない！

岩田、黒川にしがみつく。

黒川 岩田はん、気をつけてや。そっちの崖下、落ちたらアウトでっせ。

岩田 …冗談じゃないよ。

黒川 せやから云うたでしょう。あんまりええ道やおまへんて。

岩田 そう云われたら君ね、道があると思うだろうが。とりあえず道はあるんだな、と。

黒川 道はおますがな。

岩田 こういふのは世間一般では道とは云わん！ 岩がくぼんでるだけだっ！…った…たあ！ (しがみつく)

黒川 危ないで。興奮したらあきまへん。…ほんなら、一息つきますか。

黒川と岩田、岩肌に寄り掛かって休む。

岩田 黒川さん、ホントにこれしか道はないのかね。

黒川 おまへん。日電歩道ゆうて、こんな道でも、なかつたら誰も黒部川の上流にはいかれへんし、現場に資材も運べんし、えらいこつちや。

岩田 こんな細い道でどうやってものを運ぶんだ。

黒川 担いで登るに決まってますやろ。かさばるもんは部品にバラしてから、下流のほうの村からボッカさん集めて運ばせますねん。

岩田 それも、そうかね。(黒川の荷物を指す)

黒川 これ？ これは引き出物です。妹が結婚しましてん。それがあんな馬子にも衣装とはようゆうたもんでこれが吃驚するほどキレイで…

岩田 (うるさそうにさえぎって) ボッカさんってなにかね。

黒川 山歩きのうまい人足のことですわ。

岩田 背中に背負っていくのか。どのくらいの重さなのかね。

黒川 それが担ぐ重さで賃金が違うもんやから、みんな競って重いもん担ぎたがりますねん。今まで最高記録は四十貫目やったかなあ。

岩田 よんじゅ：百五十キロ……信じられん。

黒川 あれはさすがにみんな吃驚してましたわ。

岩田 事故は起きんのかね。

黒川 そらまあ、たまにね。

岩田 どんな事故かね。

黒川 落ちよります。

岩田 落ちるって、落ちたら死ぬだろう。

黒川 そらまあ、おおむね。

岩田 死人が出てるのか！

黒川 イヤイヤ、それはモチロンそうぎょうさん出とるわけやないですわ。ええと、今年は、確か……

岩田 今年は……って、毎年出てるのか！

黒川 ……十八人くらいやったかなあ。

岩田 じゅうはちにん！？

黒川 うん、二十いってませんわ、確か。

岩田 今年だけで十八人死んでるってのか！

黒川 はあ、ウチでは。

岩田 ウチでは、ってどういうことだ。

黒川 せやから滝川組の範疇では。

岩田 そりゃ、どういう……

黒川 黒部ダムのトンネル工事は四つの大手土木会社が分担して請け負うてるんですわ。大林組、加瀬組、佐川組、それとウチら滝川組。自慢やないけど、ウチは死人は少ないほうですわ。(自慢げ)

岩田 ……(無然たる面持ちで言葉を失っている)

黒川 そやけどね、いうたらなんやけど、ウチは四社のなかではいちばんワリ食うてますわ。

岩田 どういうことだね。

黒川 ウチらの担当の第一工区は、問題アリなんですわ。手エつけてからわかったことなんやけど、そらあんた、ごつつ難工事ですわ。(声をひそめ)ここだけの話やけど……

岩田 (あたりを見回す)……そりゃそうだろう。

黒川 滝川は、下ろされるかもしれまへんわ。

岩田 下ろされる？

黒川 発注取り消しですわ。発注元の日電さんが、工事の進みが遅いイゆうて、なんやカリカリゆうとるらしいですわ。

岩田 ふうん。

黒川 それで所長の村上はん、遅れ取り戻そうちゆうて、そらもうキバってはりますかな。そんなんゆうたかて、もう今年もじき雪で閉鎖やし、どもならん。

岩田 閉鎖？

黒川 せやからゆうたでしよ。黒部の上流はごつつ雪深いさかい、冬は誰もおらんようになりますよ、て。

岩田 ……ほんとうに誰も、かね。

黒川 岩田はん、あんたも疑りぶかいひとやなあ。
岩田 全員下山するという保証はないんじゃないかね。

黒川 します、て。ぼくもこれから行って来いでトンボ帰りなんですから。

岩田 工事現場には寝床も食糧もある。ひとりぐらいなら隠れて暮らせるんじゃないかね。

黒川 (呆れて) 誰が好きこのんでそんなコトしますかいな。

岩田 殺人者なら、どうかね。

黒川 ……

岩田 山を下りて世間に顔を出したくない人間なら、どうかね。

黒川 岩田さん、あんたの探してる男て、その…

岩田 ひとごろしだよ。

黒川 ……

岩田 (ひとりつぶやく) 必ずいるはずだ、戸田は。…必ず。

黒川 ……

岩田 さ、行こうか。急がんともう日が暮れるんじゃないのか。

黒川 はあ、ほんなら…

ふたり、再び崖の道をソロソロと歩き出す。

岩田 あとどのくらいだ。

黒川 もうあと少しです。四時間も歩けば…

岩田 四時間…

黒川 しんどいでつか？

岩田 なあに、捜査の基本は歩くことにあり、だ。

黒川 あ、そこ崩れやすなってます…。

岩田 うわあっ。(しがみつく)

黒川 危ない危ない。

岩田 早く云わんか、早くっ！

黒川、岩田、退場。

場転。

滝川組工務事務所。村上と野呂川、登場。
越冬隊のリストを検討している。

村上 (リストを睨みつつ) これくらいが限界か…。

野呂川 食糧はともかく、トンネル内に作る人夫たちの宿舎には空間的に限界があります。八十…多くても九十名が限度でしょうな。

村上 この事務所は宿舎に使えませんか。こっちは鉄筋だし、積雪にも耐えられる。

野呂川 ぎりぎりまでこっちを使います。積雪が二メートルを超えたら、トンネル内に移らないと身動きがとれなくなります。それまでにトンネル拡張を終えないといけないわけです。

村上 わかりました。野呂川さんは、まずそっちの指揮をお願いします。

佐野医師、登場。

佐野 村上さん。どうということなんだ。
村上 どうしました、先生。

佐野、無言で手にした書類を示す。
佐野の持っているのは下山隊のリストである。

村上 下山の組分け名簿ですが。

佐野 どういうことなのか説明してもらいたいと云っているんです。

村上 組が気に入らないなら、変えさせますが。

佐野 そんなことを云ってるんじゃない！ ここには全員の名前がないじゃないか。
人夫も総員の三分の二しかいない。村上さん、あなたも、野呂川さんの名前もない。これはなにかの冗談ですか。

村上 いいえ。

佐野 どういうことなんです。

野呂川 佐野先生。われわれはここに残ります。

佐野 …なにを云ってるんです！

村上 まあ落ち着いてください、先生。なにも先生に残れと云ってるわけじゃない。
一握りの人間だけです。

佐野 あなたがたはここで冬を越す気か！

村上 …：仕事が残ってるんですよ。

佐野 …：（啞然として言葉を失っている）

村上 先生にはお世話になった。礼を云います。どうぞ気をつけて。

佐野 気でも狂ったんじゃないのか！ 人夫小屋は平屋だ。完全に雪に埋もれてしま
う。トンネルを掘るどころじゃないだろう。

野呂川 トンネルを拡張して、臨時の宿舎を作ります。トンネルの中なら雪も降らな
い。…：通勤も楽ですな。

佐野 （野呂川の冗談にクスリとも笑わず）寒さは…：寒さはどうするんです。この山
が厳冬期、何度まで下がるか、あなたがたは知ってるんですか！ それが人夫
たちの体にどんな影響を与えるか…：

野呂川 （奇妙な笑い）温度のことは、まあ心配りません。

村上 先生、どうしてもやらなきゃならんです。

佐野 …：

佐野、村上たちのむしろ穏やかな態度に決心の固さを感じ取って黙る。
しかし佐野の憤懣はおさまらない。

佐野 私を下ろすんですか。

村上 …：

佐野 医者を下山させるんですか。

村上 先生にそこまで頼むわけにはいかない。先生との契約でも、厳冬期の勤務は除
外されています。どうぞ、山を下りてください。

佐野 無茶だ。

村上 まあ、そうです。それくらいはわかっている。

佐野 病人や怪我人が出たらどうするつもりです。
村上 応急処置はできます。先生、たった一冬、四月までのことです。

沈黙。
佐野は野呂川の手にしたリストを取る。

佐野 これはなんですか。

村上 ……

野呂川 越冬隊の名簿です。

佐野、ペンを取って自分の名前をそのリストの最後に殴り書く。
リストを投げ出す。

佐野 ……私も残ります。医者としての責任を放棄するわけにははいかない。

佐野、きびすを返して退場。
村上、野呂川、顔を見合わせる。

野呂川 ……ひとり増えましたな。

村上 ……(リストを野呂川に返す) これで打ち切りましょう。人夫たちのほうはだいぶおぼつかないですか。

野呂川 意外と平静ですな。賃金三倍がきいているんでしょう。…そうそう、ひとり妙なやつがいますね。

野呂川、リストをめくる。

野呂川 ……ああ、こいつだ。最初はこつちの人選に入ってなかったんです。あまりできるやつじゃないんで、下ろしてお払い箱にしてしまつつもりだったんですが、越冬隊の噂を聞きつけて、ぜひ入れてくれと頼みに来るんですよ。あまり真剣だったんで、ちょっと驚きました。

村上 兵役拒否じゃないでしょうね。そういうのがたまにいるが…

野呂川 それはなと思います。…なにか訳ありかもしれませんな。

村上 (リストの名前を読む)…木村次郎。

野呂川 それとなく様子を見ておきますか。

村上 あまりごたごたしたくないな…。誰か口の堅い人夫頭に耳打ちしとく程度にしてください。

野呂川 そう思つて新庄の組に入れました。

村上 新庄さんも結局残り組ですか。

野呂川 ウチの配下じゃ、いちばん信頼できる男ですよ。経験も豊富だ。

村上 わかりました。これでいきましょう。あとは…

野呂川 ……掘るだけです。

野呂川、村上退場。

人夫小屋。

人夫・戸田(木村)、辻、別所、登場。

そのへんにごろごろと座り、ねそべり、くつろぐ。

戸田はひとり離れて、じっと黙っている。

別所 どっくらせえ。：やれやれ、やっと寝れるべ。

辻 今日の仕事もつらかったのです。

別所 まったく、下山組のやつら、気がそぞろになってやがって、まるで手が動いてねえ。おかげでこっちにしわ寄せがまわってきやがる。

辻 来週にも山を下りて、あたたかな家族団らんを満喫できると思うと、手も止まるのでアリマシヨウ。

別所 けっ。おおかた女房の毛皮のことでも考えてんだろ。

辻 毛皮：とは？

別所 落語だよ、しらねえか？ ま、いいや。

辻 別所さんはもの知りでアリマスね。

別所 おめえがもの知らずなんだよ。：それにしても、いいやね、帰る家のあるやつらは。俺ら居残り組はよ、帰ったって仕方のねえ、はぐれモンばかりよ。それできや金に目がくらんだか、どっちかさ。

辻 別所さんは、くらんだのでアリマスカ。

別所 なんだとウ。(凄む)

辻 (怯む) はぐれたのですね。

別所 両方よ。

辻 納得しました。

別所 それより、よう、辻よ。

辻 ハイ。

別所 おかしいとおもわねえか。

辻 ながでアリマスカ。

別所 居残り組の人選だよ。

辻 おかしいですか。

別所 そうさ、独りもんばかりだろう。俺もそうだし、おめえもそうだ。

辻 そうでアリマス。

別所 なんだ。

辻 それには理由があるのです。実は自分は女性に近寄ると顔中の筋肉が痙攣を起こし、そのうえおかしくもないのに大声で笑い出してしまうという奇癖を持っているのでアリマス。

別所 (辻の頭を叩く) バカツタレ。だれがおめえが結婚できない理由を訊いてんだよ。そうじゃねえ、なんで居残り組は独りもんばかりだったんだよ。

辻 それはやはり、別所さんもおっしゃった通り、家族のあるものはないものより、より帰りたいという心情を汲んでのことでは：

別所 そんな温情がこの会社にあるかよ。俺は思うんだがな、つまり感謝料よ。

辻 感謝料でアリマスカ？

別所 そうだ。家族もちが現場でくたばりゃ、そのぶん会社が払う感謝料がかさむ。その点じゃ俺たちみてえなチョンガアの方が安上がりだ。つまりそういうことじゃねえかと俺は睨んでるんだ。わかるか。

辻 つまりこの冬越えて人死にがでるだろうと、会社側は予想したうえで選んでいるといふことでアリマスカ。

別所 そういうことだよ。他の工区を見てみな。冬に居残ろうなんて考えもしねえこつた。二ヶ月、三ヶ月先、ここがどんなふうになるのか、誰も知らねえんだぞ。しかし…

別所 （人の来る気配感して）しッ！

新庄、登場。

新庄 （別所たちに）おう。お疲れさん。

別所 どうも。

辻 お疲れさまでアリマス。

新庄 木村。おい木村！

戸田 …あ、ああ。

新庄 なにぼつとしてんだ。おめ、残ることになったぞ。

戸田 …。

新庄 志願したんだろが。さつき野呂川さんから正式に居残り組の組分け発表があった。おめはわしんとこの組だ。

戸田 ここに居れるのか！

新庄 おかしなやつだな、そんなにうれしいか。

戸田 いや…その…

新庄 この仕事が好きなんか。

戸田 いや…

新庄 山が好きなんか。

戸田 …。

新庄 わしが好きなんか。

戸田 …。

新庄 冗談だ。ジョーク。

戸田 …。

新庄 うけないな。

戸田 …。

新庄 なあ木村、ここにやあ、いろんなやつがいる。わしは飯場暮らしは長えから、いろんなやつを見てきたよ。なかにはひとに云えねえ事情を抱えたやつもいる。そういうやつは見りゃあわかるんだ。…おめ、何かうしろぐれえコトでもあるんか。

戸田 …なにもねえよ。

新庄 まあ、深くは訊かねえがな、これだけは覚えといてくれろ。現場にいるときは現場のことだけを考えるんだ。そうでねえと、命落とす。この仕事はそういう仕事だ。わかるか。

戸田 …ああ。

新庄 どのみち春までは山を下りられねえ。下からも誰も上がってはこれねえ。考えようによっちゃ、ここは檻の中みてえなもんだぞ。

戸田 …。

新庄 （戸田の肩をポンと叩き）ま、きばってくれろ。そんだけだ。

戸田 …ああ。

新庄、退場。
それまで耳をそばだてていた別所と辻、木村のそばに寄ってくる。

別所 ようよう、にいさんよ。

戸田 ……

別所 あんた、志願して居残ったのかい？

戸田 ……

戸田、黙って立ち上がる。
別所、それを押しとどめる。

別所 待てよ、にいさん。

戸田 ……

別所 まあ待って。…別にあんたのことをどうこう云うつもりはねえんだ。同じ居残り組同士、ちつと話でもしようってだけよ。

戸田 ……別に話はない。

別所 まあそう云うなって。おれア別所ってんだ。別所毅。上州産だ。こっちの若いのは辻礼二郎ってケチな野郎だ。

辻 辻でアリマス。生まれは周防でアリマス。

別所 あんた、名前は？

戸田 ……木村次郎。

別所 木村さんか。なあ木村さんよ、ぶっちゃけた話、あんた、どう思う？

戸田 なが。

別所 この工事のことさね。どだい黒部の山奥でこんな大仕事をやらかすこと自体、無理な話なんだ。そこへ持ってきて今度は冬越えときた。組の連中、あんまり工事が進まねえんで、アタマがどうかしちゃまったんじゃねえかと思うぜ。

辻 佐川組や加瀬組の受け持ち工区は、ほとんど予定通り進んでいるそうなのです。そうらしいなあ。

別所 滝川組は、実績からしても五本の指に入る大手でアリマスから、引くに引けない立場なんでアリマシヨウね。

別所 メンツつてもんがあるからなあ。

辻 できるできないより、やらねばならぬ、の心境でアリマシヨウ。

別所 実際、こんだけ事故も起きて、何人も死んでるんだ。世間じゃさうとう問題にしているらしいじゃねえか。

辻 管轄の富山県警は中止命令を出すべしというのが、世論の主流でアリマスな。県警もその方向で動き始めているそうでアリマス。

戸田 ……圧力だよ。

別所 あん？ なんだって？

戸田 工事の発注元は日本電力だ。国の後押しがある。警察に上から圧力がかかっているんだ。…中止命令なんか出ないぜ。

辻 上からの圧力、というと…

戸田 ……

辻 なるほど、そういうことでアリマスか。

別所 なんだよ、どういふことだよ。

辻 支那事変でアリマス。
別所 はあ？

辻 今、日本は満州から中国へ侵攻しているのです。徐州や広東など、広大な地域を占領して、さらに拡大しようとしている。戦線を維持するにはより多くの武力が必要とされるわけでアリマス。

別所 そんなことアわかってるよ。

辻 武器生産に必要なのは、何をおいても電力でアリマシヨウ。

別所 …あ。

辻 そんなわけで、黒部第三発電所の建設は、今や国家的火急事なのでアリマス。

別所 じゃあ圧力をかけてんのは、陸軍省か…。

辻 金棒を持った鬼でアリマスね。

別所 そりゃあ逆らえねえわけだ。…するつてえと、こうやつて毎日穴ぐらにこもって山アほじくり返してる俺たちや、お国に貢献する産業戦士ツてえわけかい。泣けてくるねえ。

辻 勲章のひとつももらいたいものでアリマス。

別所 やれやれ…。冗談じゃねえや、まったく。

別所、ふてくされて寝転がる。

夕闇が迫っている。

外はいつの間にか、吹雪いているようだ。

びょうびょうたる風の音が聞こえている。

辻 木村サン。

戸田 なんだ。

辻 木村サンは、ご家族はご健在なのでアリマスか。

戸田 …そんなものはねえよ。

辻 そうですか。…自分は田舎に家族がいるのです。父は隠居して兄が家を継いでいるのです。自分は次男なのです。

戸田 礼二郎って名前聞きゃわかるよ。

辻 そうでアリマスね。…木村サンも次男でアリマスか。

戸田 いや、俺は…

辻 木村サンも、ジロウでアリマシヨウ？

戸田 ああ、うん、そう、次男坊さ。

辻 …。

戸田 周防って、どこだい？

辻 山口県でアリマス。昔の長州。

戸田 ああ、その、アリマス、つてのは、長州訛りか。

辻 そうでアリマス。

戸田 …遠いな。

辻 ハイ、遠いのです。…木村サンはどちらの生まれでアリマスか。

戸田 神奈川さ。

辻 横浜港のあるところではアリマスね。

戸田 そうだ。

辻 木村サンは…はぐれたのでアリマスか。

戸田 ……なんだって？

辻 それとも眩んだのでアリマスか。

戸田 なんない、そりゃ。

辻 こんなところに好きこのんで居残る人間は、金に目が眩んだか世間からはぐれたかどつちかだ、と、別所サンが。

別所はいつの間にか眠り込んでいるようだ。

戸田 ……そりゃあ、はぐれたのさ。

辻 そうでアリマスか。

戸田 そう…道から外れたんだよ…気がついたら…

戸田が窓の外を見ると、すでに深々と暮れている。

戸田 気がついたら、闇のなかさ…。

立ち尽くす戸田。

工事事務所に黒川、岩田登場。

それを迎える野呂川、村上、登場。

岩田、全身汗だくで、床に崩れ落ちる。

野呂川 クロ、どうした、遅かったじゃないか。

黒川 野呂川はん、いや、まいりましたわ。実は、コブつきですねん。

野呂川 この人は？

黒川 どうしてもここに来んならんちゆうて、道案内頼まれました。

岩田 せき…(咳込む)…責任者は…誰だ？

野呂川 はあ？

村上 私です。滝川組工事課長の村上ですが。あなたは？

岩田、ようやく立ち上がり、手帳をかざす。

岩田 私は国家警察神奈川県警本部・捜査一課、岩田精治警部補だ。ここに戸田幸市

という男がいるはずだ。…引き渡してもらおう。

村上 ……

顔を見合わせる村上と野呂川。

岩田、それだけ言うと、再びぼったりと倒れる。

野呂川と黒川、あわてて岩田を支える。

暗転。

シーン3 発見／岩盤温度六十五度／事故

工事事務所。

佐野医師、カルテらしきものを持って登場。

野呂川、登場。

野呂川 佐野先生。

佐野 ああ、野呂川さん。下山のほうはどうです。

野呂川 今、最終組が出るところです。やっと終わりですわ。

佐野 そうですか。居残り組は一通り健康診断をしようと思います。

野呂川 全員ですか。

佐野 ええ。日に五六人づつ寄越してください。総員が九十二名ですから、三週間ほどで終わるでしょう。

野呂川 わかりました。それで…例の刑事はどんなです？

佐野 ようやく熱は下がってきました。典型的な高山病ですよ。慣れない山歩きで無理したのがいけなかったんでしょう。

野呂川 下山できますか。

佐野 それは難しいですね。体力が落ちているので…。

野呂川 しかし、今日下ろしてしまわないと…。かなり雪も積もり始めているし、下手したら一冬ここで過ごすことになる。

佐野 …誰かに担がせて下ろすんですな。ひとりでは無理です。

野呂川 …。(考え込む)

ふらふらしながら、岩田登場。

岩田 おい！ ころら！

佐野 なにしてるんです、フラフラと。寝ていなさい！

岩田 どういうことだ！

佐野 なにがです。

岩田 俺は…俺はどうしたんだ…

佐野 あなたは高山病です。それに軽い感冒にもかかっている。

岩田 俺はずっと、その、ここで寝ていたのか…。

佐野 そうです。

岩田 どのくらいだ。

佐野 あなたがここにきてから、今日で四日目です。

岩田 四日…四日だと？

野呂川 刑事さん、私は滝川組の野呂川です。ええ、まず、お尋ねの戸田という男は、ここにはおりません。

岩田 …四日も無駄に過ごしたのか、俺は。

野呂川 刑事さん、今日、山を下りていたただかないとならんです。下山組はもうあらかた下りて…

岩田 下山組？ 下山組とはなんだ。どういう意味だ！

野呂川 はあ、ですから…

岩田 あんたたちは山を下りないのか。

野呂川 一部の作業員が残って越冬工事をします。

岩田 越冬…ここに残るんだな？ 残る人間がいるんだな？

野呂川 ほんの一部ですが。あの、刑事さん！

岩田 何人だ。何人残るんだ！

野呂川 きゅ…九十二名です。

岩田 …。

野呂川 あの、とにかく山を…

岩田 私がここへきたことを知っているものは？

野呂川 私ら上のものでありますが。

岩田 戸田は恐らく偽名を使っている。そして間違いなくここに残っている。その九十二名に会わせてもらおう。

野呂川 会わせるって云ったって、そりゃあ…

岩田 戸田はそのなかにいる。必ずいる…。さあ、あんた、野呂川さんか、案内してもらおう。

野呂川 佐野先生。

佐野 (どうしようもないな、というように肩をすくめて)…お好きなように。ただし、また倒れても責任は持ちませんよ。

岩田 結構。責任は私が持つ。さあ、案内しなさい。どこにいるんだ、彼らは。

野呂川 今はほとんどトンネルのなかですが…。

岩田 行こう。

野呂川 はあ、じゃあ、まあ…

野呂川、岩田、退場。
佐野、退場。

場転。

第一トンネル、坑内。

濛々たる湯気が立ちこめるなか、複数の削岩機の音が断続して響く。

岩田、野呂川に続いて登場。

岩田 …なんだ、ここは…。

野呂川 ああ、ヘルメットは脱がんぼうがいいですよ。天井から熱いのが落ちてきますから…。

岩田 …。

野呂川 岩に触ってご覧なさい。

岩田、恐る恐る岩肌を手を当てる。

岩田 …熱い。

野呂川 岩盤温度は摂氏六十五度。坑内の気温は平均して四十度あります。ちょっとした蒸し風呂ですわ。

岩田 どういうことなんだ。

野呂川 このあたりは日本でも有数の温泉地帯なんですな。掘り始めてからわかったことですが、計画されたトンネルの軌道は、その高温層の中心に当たっているんです。

岩田 こんなところで一日中作業しているのか！

野呂川 今のところ、問題はそれです。この環境じゃ、どんなに体力のある人夫でも三時間ともたない。こまめに交代しないとならない。作業の遅れの主な原因もそれです。

岩田 今のところ、というと？

野呂川 ……問題は、ここがまだ掘り始めて三十メートル付近に過ぎないということです。

岩田 どういう…

手動の警告サイレンが、短く鳴る。

野呂川 岩田さん、ここで待ちましょう。

岩田 この奥にいるんだろう？

野呂川 みんな、戻ってきますよ。これから発破に点火しますから。

岩田 発破とは、ダイナマイトか。

野呂川 ここじゃ実際にトンネルを掘るのはダイナマイトです。人夫の仕事は発破を差し込む直径一メートルほどの穴をあけることと、崩れた岩の破片をトロツコに積んで運び出すことです。…ほら、戻ってきた。

辻、別所、戸田、登場。

岩田、目をこらして人夫たちの顔を見極めようとする。
通り過ぎようとする戸田の後ろから、岩田が声をかける。

岩田 戸田！

戸田 ……(びくりと止まるが、振り向かない)

岩田 戸田幸市だな。

戸田 ……(振り向く)

岩田、その顔をじっと見つめる。

辻 木村サン？

戸田 ……

岩田 ……やっと思つけたぞ、戸田。

木村、やおら身を翻して坑道を奥へ駆け戻ろうとする。
岩田、後を追う。

別所 お、おい、あんた！

辻 木村サン！

辻、別所も後を追う。

岩田が戸田に飛びつき、二人とも倒れる。

岩田 観念しろ！ 戸田！

戸田 (わめき声) やってねえ！ 俺はやってねえよ！

岩田 貴様…殺してやる…この手で殺してやる！

辻、別所、岩田を引き離そうとする。

別所 ちよつ、ちよつと待てや、あんた！
岩田 離せ！

野呂川、坑道の奥へ叫ぶ。

野呂川 新庄！ 点火中止だ！ こっちへ来てくれ！ 聞こえたか！ こっちへ来てくれ！

新庄（声） おおう！

戸田の首を絞める岩田をやつとのことで引き離す別所たち。
戸田はよろめきつつ立ち上がり、さらに奥へと逃れようとする。

岩田 待て！…ええい離せ！ あいつを殺す！
別所 あんた刑事だろうが！

新庄、坑道の奥より登場。

戸田と鉢合わせする。

戸田、咄嗟に新庄を楯にとる。

手には隠し持ったナイフが、新庄の喉に当てられている。

戸田 くるな！ くるなあつ！

岩田 戸田：貴様ア：

野呂川 新さん。発破は：

新庄 点火はしてねえです。だいじょうぶ。

岩田 戸田ッ！ あきらめろ！

戸田 寄るな！

新庄 …木村、落ち着けや。

戸田 …。

新庄 木村じゃねえ、戸田っていうんか？ どういう事情が知らんが、こりやどう見てもおめさんの負けだぞ。

戸田 黙ってる！

新庄 こんなちつこいナイフ一本で全員とやり合う気か？ そりゃ利口とは云えねえな。

戸田 …。

新庄 ここはひとつ冷静になったほうがよくねえかい。

戸田 …確かにこんな武器じゃ切り抜けられねえだろうな。だが新庄さん、忘れたか？ この奥になにかあるか…

新庄 …。

戸田 そういふことだ。

新庄 よせ、木村。

戸田 遅いんだ。もう遅いんだよ！

戸田、新庄を突き飛ばし、奥へ。

岩田 戸田ッ！

岩田、新庄の横をすり抜けて戸田を追う。

その瞬間、耳を聳せんばかりの爆音が轟く。

足元を揺らす振動と同時に風圧が襲う。

より奥にいた戸田と岩田は岩の上に投げ出される。

別所 発破だ…。新庄さん、あんた、点火してきたんか！

新庄 いや、してねえ…。ノロさん、こりゃあ…

野呂川 いかん。退避しろ！

辻 木村さんたちが…

戸田と岩田、倒れたまま動かない。

野呂川 担いでいくんだ。早くしろ！

野呂川たち、戸田と岩田を助け起こし、引きずるようにして運びはじめる。
全員、退場。

場転。

工事事務所。

村上、続いて黒川、登場。

村上 八十五度？

黒川 はい。

村上 確かか。間違いじゃないのか。

黒川 間違いありません。

村上 …。

黒川 うかつでした。下山のドタバタに紛れて、岩盤温度の確認を怠っていたんです。
村上 それにしても八十五度とは…

野呂川、登場。

野呂川 課長。

村上 ノロさん、どうでした。

野呂川 やはり自然発火です。

村上 しかし八十五度で自然発火とは…

野呂川 おそらく部分的に異常に高温な箇所があって、何本かが爆発し、残りを巻き
込んだんでしょう。結局二十四本きれいに全部やられています。

村上 …。

佐野医師、登場。

佐野 村上さん、工事は中止でしょうね。

村上 …。

佐野 ダイナマイトが勝手に爆発するんじゃ、手の打ちようがない。越冬隊は解散で
すな。

野呂川 佐野先生、それは…

佐野 さいわいまだ雪もそれほどひどくない。下山できるんじゃありませんか？ 一
冬ここで無為に過ごすのも芸がない話だ。さっそく準備して…

村上 黙ってる、若造！

佐野、村上の一喝に体を強張らせる。

村上 …佐野先生、余計な口出しは無用に願います。

佐野 し、しかし：

村上 あなたがプロの医者であるように、我々は隧道工事のプロです。打つ手はありません。必ず見つけます。先生。

佐野 ……なんです。

村上 あなたの患者の状態が悪くなったとき、あなたはそんなに簡単に匙を投げられますか？

佐野 それは…

村上 最後の最後まで救おうとするでしょう。我々も同じです。…怒鳴ったりして申し訳なかった。勘弁して下さい。

佐野 ……

村上 野呂川さん。トンネル内の仮宿舍作りを急いで下さい。トンネルの方はしばらく作業を休止しますから、その分の人員を使って下さい。

野呂川 わかりました。

野呂川、退場。

村上 黒川くん、一緒に来てくれ。相談したい。

黒川 はあ。あの、どちらへ？

村上 少し登った所に溪流があつたら？

黒川 はあ、川でつか？ ありましたけど…

村上 ちょっと思いついたことがあるんだ。まあ一緒に来てくれ。

村上 そうそう、佐野先生。あの刑事と、木村だか戸田だかいう人夫は、どんな具合です？

佐野 ……刑事のほうは足首の捻挫で、そうひどくはない。人夫は倒れたとき頭を打っています。二人とも軽い脳震盪で、まだ意識がありません。

村上 そうですか。命に別状はないんですね。

佐野 ええ、それは。

村上 今はトンネルの中ですか。

佐野 応急処置だけ向こうで…。こっちに運ばせるところです。

村上 申し訳ないが、私には彼らにかまっている時間がない。なにか問題が起きたら知らせてもらえますか。

佐野 ……わかりました。

村上 さ、行こうか。仕事だ。

黒川 へえ、ほな。

村上、黒川、退場。

辻が岩田を、別所が戸田を担いで登場。

別所 せんせえ、ここでもいいですかい？

佐野 (我に返って)…ああ、すまないな。二人ともそこへ寝かせてくれ。

別所 へい。

佐野 そつとだ、そつと頼むぞ。

別所 なあに、こんな野郎はちよつとやそつとじゃくたばりやしませんぜ。

辻 この刑事サンも、どうやら殺しても死なない部類なのでアリマス。

辻と別所、気を失ったままの二人を寝かせる。

佐野 ああ、もうちよつと離して…そう、そこでいい。ああ、それからその真ん中あたりに、その椅子を置いといてくれ。

別所 は？ この椅子ですかい？…ここに？

佐野 うん。そう、そこ。ありがとう。ご苦労さん。

佐野、二人の診察を始める。

別所 あのウ…佐野せんせえ。

佐野 ん。なんだ、なにか用かい？

別所 いやあ、用ってほどのこともねえんだけど。その…

辻 発破が自然発火したというのは本当でアリマスか？

佐野 ……そう聞いている。

別所 じゃあ、工事は中止で？

佐野 それは…私の決めることじゃない。滝川組の人間に聞きなさい。はあ。

佐野 私個人としては中止にするべきだと思うがね。君らもそう思ったら、遠慮なく主張したほうがいい。もし私から云って欲しければ私も男だ、もう一度…

別所 いや、あの…そうじゃねえんで。

佐野 なにがだ。

別所 中止になってもらっちゃ困るんで。

佐野 ……どういことだ。

別所 どうって、まあ、文字通り、困るってこつてす。(指でマルを作ってみせる)これできあ…。

佐野 ……金、か。

辻 越冬隊には通常の三倍の賃金が約束されているのでアリマス。

別所 この一冬で、他の現場で一年働いても稼げねえ額の日当を稼げるんですぜ。

佐野 だが…金だけの問題じゃないだろう。

別所 せんせえ、莫迦云っちゃいけねえ。金のためでなくてなんのためにこんな仕事をしますか。

佐野 しかし、それも命あつてのことだろう！ 実際この仕事は危険すぎる。

別所 まあねえ…。だけど、会社がだいじょうぶだつて云やあ、俺たちやあそれを信用する。俺たちの信用があつてこそ会社もやっていける。信頼関係つてやつでさあ。

佐野 信頼関係…か。君たちはそれほど滝川組を信頼しているのか。

別所 そう真つ向から聞かれると辛えが…まあ、建前はそうできあ。

佐野 建前…。

別所 心底、腹の底から信用してマスつて云つたら、そりやあどつか嘘になる。けどセンセエ、世の中どっかで見切りつけなきゃあ、渡って行けませんやね…。

佐野 ……

別所 そいじゃ。オイ、行くぞ。

辻 あの、佐野先生。恐れ入りますが自分に虫下しのクスリを頂け…
佐野 ハイ。(みなまで言わせずポケットからクスリを出す)

辻 早いのです。

別所 三日とあげずにもらいにくるからだ、タコ！ 行くぞ！
辻 お世話さまでアリマシタ。

別所、辻、退場。

佐野 建前…か。

岩田、呻き声をあげて身じろぎする。

岩田 ここは…

佐野 気がつきましたね。倒れても責任は持たないと云ったでしょう。
岩田 …。

岩田、しばし茫然とした後、記憶が蘇る。

岩田 戸田…戸田はどこだ！

佐野、黙って目で指す。

岩田 …！

岩田、戸田を認めるとものも云わず跳ね起き戸田の方に駆け寄ろうとする。

岩田 …痛ッ！ あっ！ おうっ！

岩田、足の痛みに負け、丁度中間地点にあった椅子に崩れるように座り込む。
佐野、自分の予想の正しさに満足し、ひとり頷く。

佐野 あなたの足はひどい捻挫です。当分は杖無しでは歩けません。

岩田 先に云わんか、先に…！ あいたたたた…。

佐野 無茶する人だ。

岩田 やつは…やつはどうなんだ。

佐野 あなたよりも運がよかった。擦り傷に、軽い脳震盪だけです。

岩田 悪運の強い野郎だ…。

佐野 あなた、彼を殺そうとしたそうですね。

岩田 …。

佐野 神奈川の警察では、犯人に対する切り捨て御免の自由が認められているんですか？
いつから日本は江戸時代に逆戻りしたんですかな。

岩田 …。

佐野 まあ、少し頭を冷やしたらどうです。

佐野、湯飲みに水を汲み、岩田に手渡す。
佐野、それを飲み干し、大きく息を吐く。

岩田 先生。

佐野 佐野です。

岩田 (頷いて) 佐野先生。どうもたいへんお世話になったようだ。(大きく頭を下げ
る) この通り、礼を云います。

佐野 医者の仕事をしただけです。それに、村上課長からあなたの世話係を申しつけ
られているんですよ。

岩田 いや、やっかいをかける。(再び頭を下げる)

佐野 それで、岩田さん、はつきりさせておきたいんですが…。礼状はないんですね？
…。

佐野 これは警察の公式な捜査ですか？ それともあなたの私的な行動ですか？

岩田 …。(迷っているが、きつぱりと顔を上げる) それは、後者だ。

佐野 そうだと思いました。

岩田 礼状も持つてはいない。そもそも逮捕状も出ていない。自分には長期休
暇願いの届出をしてきた。

佐野 彼は単なる容疑者？

岩田 そうだ。有力な容疑者と云うに過ぎん。しかしそれはただ証拠が足りないだけ
だ。間違いないんだ。この男がやった。それは捜査員全員が確信している。

佐野 たとえどんなに確信があろうと、今のあなたが公僕でない以上…

岩田 その通りだ。これは、私個人の私的な調査であり、職務を逸脱した行動だ。私
は…私は警察を辞める覚悟をしてきた。

佐野 …なにがあったんです。この男はなにをしたんです。
…。

岩田 岩田さん。

佐野 警官を、ひとり、殺した…。

岩田 警官？ あなたの同僚ですか。

岩田 (首を横に振る)…年老いた、平の巡査だった。岩田弦治。長い間交番で警邏を
勤めあげ、退職も間近だった。出世とは縁がなかったが、地道に、きれいで立
派な仕事をしてきた。家庭ではもの静かで、水彩画を描くのが唯一の趣味だっ
た。私はずっと見てきたんだ。

佐野 …それは…岩田さん、あなたの…
…父親だ。

岩田 戸田、呻きを発して体を動かす。
岩田、戸田を見る。その目の色は暗い。

岩田 被害者が身内ということ、私は捜査から外された。ひとりで歩き回って、調
べた。そしてこの男に、この山に、たどり着いた。

佐野 …岩田さん。たとえほんとうにこの男が犯人でも、あなたのやろうとしている
ことは…

岩田 わかっている。だが他にどうしようもないんだ。佐野先生、あなたにわかって
もらおうとは思わん。

佐野 …どうしようもないことが、多過ぎますな…。
…。

岩田 …。

佐野と岩田、黙り込む。
別の場所。
トンネル付近の溪流に、村上、黒川、登場。

村上 ……どうだろう、できるかな。

黒川 いけると思います。

村上 いったん水槽にためて、そこからパイプに送るんだ。

黒川 ポンプで吸い上げなあきまへんな。

村上 うん。この水はかなり冷たい。切端まで送ってもすぐには温度は上がらないだろう。

黒川 いけますな。

村上 発破を仕掛ける前に、水で岩を冷やす。一時的にでも岩盤温度を下げることができれば、作業可能だ。

黒川 水冷式ちゅうわけですな。……いっそのことシャワー状にしたらどうでっしゃろ。

村上 シャワー状？

黒川 水を送るパイプに穴を開けて、人夫たちの体にかかるように、シャワー状に降らせる…。

村上 そうか、いいぞ、それで作業時間がだいぶ伸びる。

黒川 人夫たちも機嫌よう働けまっしゃろ。

村上 ……取りかかろう。資材は？

黒川 あり合わせでできますわ。

村上 頼んだぞ。

黒川 任しといて下さい。ほな！

黒川、退場。

村上、ひとり残る。

村上 ……負けんぞ……負けてたまるか…

事務所では佐野が、沈黙を破る。

佐野 ……岩田さん。ひとつ約束してくれませんか。

岩田 なんです。

佐野 この冬を越すまで、待ってください。

岩田 ……

佐野 ここからはどこにも逃げられない。あなたも見張っていられる。なにをするにせよ、雪が融けるまで、どうか一冬待ってください。その後、あなたがどうしようも、私はなにも云わない。お願いします。

岩田 なぜです。

佐野 ……

岩田 それになんの意味があるんです。医者 of 義務感ですか？ 人が傷つくのを見過

ごせない？

佐野 それも、あるかもしれません。いや……それだけじゃない…

岩田 ……？

佐野 私は、怖いかもしれない。

岩田 なにがです？

佐野 ……冬が来ます。誰も見たことがない冬が。我々は人間同士でしばしば殺し合うし、現に今も日本は戦争という名の殺しを続けている。こんなことはここですか云えないが…。ここにいと、忘れていたことを思い出すんですよ。

岩田 思い出す？

佐野 人間の最大の敵は常に、自然だったということだね。人間同士の殺し合いより遙かに大量の人々が、自然との闘いに敗れて死んでいった。だから…

岩田 だから？

佐野 せめて人間同士寄り添っていなければ、と…。そうでなければ、あつと云う間にやられてしまう、と。そんな気がするんです。

岩田 ……

岩田の理解が及ばない、原始的な恐怖心が佐野を捉えている。

岩田は佐野の横顔をじつと見ている。

岩田はそこに、理解できないながら、なにかを見た。

岩田 ……いいでしょう、先生。約束しましょう。

佐野 ……

岩田 この冬を越すまで。

佐野 ええ、この冬を越すまで…。この冬を…越せば…。

村上のいる場所に、野呂川、登場。

野呂川 課長。

村上 ……

野呂川 今、無線で連絡が入りました。他の工区もすべて下山が完了したそうです。…山にしているのは我々だけです。

村上 そうですか。

野呂川 雪が来ます。今夜から吹雪くそうです。まるで下山が終わるのを待っていたようですね。

村上 ……

村上、黙って夜の闇を見つめている。

事務所では佐野と岩田が、やはり同じ闇を見つめている。

暗転。

シーン4 進捗／竹／雪崩

暗中、水が逝る音、人夫たちの声、サイレン、発破の音など。

明かり。

工事事務所。

別所、辻、水滴を滴らせながら登場。
そうとう疲労しているようだ。

別所 ふう……。だんだんこっちへ戻って来るのも難儀になってきやがった…。

辻 いっこうに止みそうにないのです。

別所 十二月に入ってから降りっぱなしじゃねえか。

辻 もう二メートル近く積もっているのです。いずれ雪かきが追いつかなくなります。

別所 このうえ雪かきまでさせられたら身がもたねえよ。

辻 そう云えば、自分は雪かきを仰せつかったことがありません。

別所 俺だつてそんなことしてねえよ。人夫は雪かき免除よ。

辻 え、そうなのでアリマスか。

別所 おまえは相変わらず浮き世離れしてやがんなあ。そりゃ暗黙の了解つてやつよ。会社もこれ以上俺たちに負担はかけられねえさ。

辻 では誰が雪かきを…

別所 決まつてらあな、それくらいしか能のねえやつだよ。

鉢巻き姿でスコップを担いだ岩田、登場。

岩田 おう、休憩か。ご苦労さま。

別所 な。

辻 刑事サンが…

岩田 まだ吹雪いてるか。

別所 へえ。止む気配もありませんや。

岩田 聞きしにまさるとはこのことだな。もう掻いても掻いても追いつかん。

辻 ご苦労様でアリマス。

岩田 君たち、茶でも飲むか。入れよう。

辻 刑事サンにそんなことをしてもらつてはバチがあたるのです。

岩田 いいからいいから。なにかしていいないといられん夕チなのだ。まして本官は居候だしな。

岩田、甲斐甲斐しく茶の用意をする。

辻 なぜ刑事が雪かきを？

別所 買ってでたそうだけ。自分は一冬居候の身分だ、ぶらぶら遊んでいるわけにはいかない、なにか仕事をせんとけじめがつかん、つてな。

辻 ははあ、潔い人物でアリマスね。

別所 変つてらあな。

岩田、戻ってきて盆に乗せた茶を差し出す。

岩田 ホラ。

別所 お、ありがてえ。

辻 恐縮でアリマス。

岩田 それにしてもこの調子で降り続けたら、いずれどうにもならなくなるぞ。会社の連中はどうするつもりかな。

辻 トンネル内の仮宿舎がもうすぐ完成ですから、人夫はそちらに移ることになるようです。

岩田 こっちの建物は放棄するのか。

別所 そういうわけにはいきませんや。

辻 食糧やら資材やらはこちらの倉庫にあるわけですから、全然寄りつかないわけにはいかないのです。

岩田 すると必要なときには雪をかきわけて往復するというわけか。…この建物はだいたいどうぶなのかな。

別所 まあ、こっちは鉄筋で三階建てだ。今まで保ったんだから…

岩田 そうか、これまでもこの建物は冬を越してるわけだ。

佐野医師、登場。

佐野 ああ岩田さん、どうです、足の具合は。

岩田 おかげですっかりいいようだ。お世話になった。

佐野 あまり無茶しないように。…君たちは今日はあがりかな？

別所 いや、もうひと仕事まわってきませう。

佐野 そうか。それなら注射をするから、診療室で待っていてくれ。

別所 またヤクですかい。

佐野 中毒性はないから安心したまえ。

別所、辻、茶をおいて腰をあげる。

辻 あの、佐野先生、申し訳ありませんが自分に虫…

佐野 ハイ。(ポケットから取り出し渡す)

辻 日に日に早くなるのです。

別所 おまえのその腹の虫、なんとかしやがれ。

別所、辻、退場。

岩田 先生、茶でもいかがです。

佐野 いや、けっこうです。

岩田 注射とはなんのことです？

佐野 ああ、カルシウム注射ですよ。

岩田 カルシウム？

佐野 ええ。今、トンネル内の気温は五十度に達しています。普通なら三十分ともたないところを、人夫たちは二時間交代で作業している。脱水症状からくる失神をくい止める作用があるんです。

岩田 五十度：ちよつと想像がつかないが：

佐野 入浴の適温：つまり風呂の湯の温度が四十二、三度ですよ。五十度の湯なら熱くて入れんでしょ。

岩田 そんなところに二時間も：

佐野 それが限界：いや、限界と云えば最初から限界は超えていますかね。

岩田 水をかける方式はうまくいってるとるんですか？

佐野 今のところはいいようです。ダイナマイトの事故もなくなった。工事を進めるには有効な手段というわけです。人夫にはさほどでもありません。

岩田 というと？

佐野 排水設備がないから、水はトンネル内に溜まって、トンネルの出口に向かって流れます。その水はすぐにお湯になる。人夫たちは下半身を湯に浸して、流れに逆らってふんばっていななければならない。それで余計な体力を消耗する。

岩田 いいことばかりではないわけですか。

佐野 傷：これほど過酷な労働条件は日本中どこを探しても見あたらないうし。それな

岩田 それでも彼らはトンネルに入っていく…。

佐野 なぜ、とおっしゃりたいですか？ 私も以前、そう聞いた。答えは岩田さんが今考えていることと同じです。

岩田 …。

しばし黙り込むふたり。

遠くで地鳴りのような音が響く。

岩田 あれは：

佐野 雪崩の音ですよ。

岩田 かなり頻繁に聞こえるが…。

佐野 早く、人夫をトンネルの中に移さなければいけない…。

岩田 しかしこの建物はだいたいぶでしよう？

佐野 岩田さん、ほんとうにそう思いますか？ 私には確信がない。…まあトンネルの中にいれば安心と云えるでしょうが…。

岩田 …。佐野先生、その…戸田はどうしています。

佐野 彼は仮宿舍のほうをやっているようです。なにも変わったことはありませんよ。

岩田 そうですか…。

佐野 それじゃあ…。

佐野、退場。

岩田、退場。

坑内。

削岩機の音。人夫の声。(佐野と岩田がいる間に出しても可)

吹雪の音に混じって、ごうごうと風の音がする。

少し遅れて大きな騒音。

坑道を慌てて駆けてくる黒川。

反対側から野呂川。

黒川 ノロさん！ えらいこつちや！

野呂川 どうした、なにがあつたんだ。今の音はなんだ！

黒川 トロッコが…横転して…人夫が下敷きに…

野呂川 誰か！ こっちへ来てくれ！

戸田、野呂川の側から登場。

野呂川 戸田！ トロッコが横転して人夫が下敷きになった。人手を呼べ！ それか

ら事務所の人に人をやって、佐野先生を呼ぶんだ！

戸田 わ、わかった…！

野呂川 クロ、案内しろ！

黒川 こっちです！

戸田、退場。

黒川、野呂川、退場。

騒然たる坑内の雰囲気。

やや時間が経過する。

坑内の仮宿舍。

村上、黒川、新庄、登場。

村上 ……どうということなんだ。なぜトロッコが脱線したんだ？ 黒川くん。

黒川 ……わかりまへん。ボクには…。

村上 わからないじゃないだろう！

黒川 し、新庄サンが、そばにいてはりました…

村上 新庄さん、どういう状況だったんだ？ 説明してくれ。

新庄 へえ。…今日二回目の発破が終わって、ズリ出しを始めたところでした。目一杯積んで、運び出そうとしたとき、急に…

村上 急に、なんだ？

新庄 トンネルの中が冷たくなったです。

村上 冷たく？

新庄 へえ。

黒川 そ、そうですわ。あの熱い坑内が、なんや急にヒヤッと…。ボク、鳥肌たったの覚えてますわ！

村上 どういうことだ。

新庄 それから、空気が押し寄せてきました。

村上 空気？

新庄 へえ。

村上 風ってことか…？

黒川 そうです！ 間違いないですわ！ あのとき、自分の体が浮き上がるような感じがしたんです。そうか、風やつたんか！

村上 莫迦な！ ズリを目一杯積んだトロッコが風で倒れたというのか？ 冗談も休み休みいたまえ！

黒川 いや、そやけど…

新庄 ……課長さん…ありやあ、たぶん、雪崩の風です。

村上 雪崩の風だと？

新庄 へえ、雪崩で起きた風が、たまたまトンネルに入ってきたんですわ。
村上 …。

新庄 積もった雪の重みはそりゃあ考えられねえほどです。その重みに押し出された
空気はちやうど鉄砲水みてえに、おっとりしい勢いで走ります。ありゃあ、そ
れです。

黒川 そうか！ それで、狭いトンネルのなかだから勢いが衰えずに…

村上 莫迦な…。

佐野医師、登場。
白衣、手袋には血が付着している。

村上 先生…。

佐野 …。(じっと村上の目を見つめているが、黙ったまま、首を横に振る)

村上 …。

佐野 手の施しようがなかった。…出血多量です。

村上 …。(黙ったまま、ご苦労でしたというように頭を下げる)

佐野 …残念です。

村上 黒川くん、仏を埋葬する。準備を。

黒川 えっ。ボ、ボクでっか？

村上 そうだ。早く。

黒川 新庄サン…。(助けを求めて新庄を見る)

新庄 …。(問うように村上を見る)

村上 (新庄に対し首を横に振る。そして黒川に言い聞かせるように)…黒川くん、こ
れは我々の仕事だ。君は人夫たちに、死んだ仲間を葬る仕事をさせる気か。埋
葬は滝川組の人間でやるんだ。そうしなければならんだ。私の云ってる意味
がわかるか。
…。

黒川 …。
黒川は村上の真剣さから、なにかを学んだようだ。
村上は新庄に向かって深々と頭を下げる。

村上 新庄さん、申し訳ない。死者は我々が丁重に埋葬する。今後、こんなことが起
きないよう、滝川組は全力を尽くす。人夫たちの動揺を鎮めてください。

新庄 へえ。わかりました。

黒川、新庄、退場。
見送る村上。

佐野 …信頼関係…ですか。

村上 …。

佐野 工事は続行、でしょうな。

村上 先生。

佐野 いや、なにも云わなくてけっこう。私は金で雇われた医者だ。口出しする気は
ない。ただ…

村上 …ただ？

佐野 冬が過ぎたらこの仕事は下ろさせてもらいます。目の前で人が死んでいくのを黙って見ていることほど、医者として辛いことはない…。

村上 先生、それはあなただけじゃありませんよ。

佐野 …ほんとうにそうですか？

村上 …。

睨み合う佐野と村上。

野呂川、登場。

野呂川 課長。

村上 どうした。

野呂川 …。

野呂川、佐野を見る。

佐野 はずしでしょうか。

村上 いや、先生、その必要はありません。…云ってくれ、ノロさん。今度はなんだ。
野呂川 岩盤温度ですが、また上がり始めてます。

野呂川、温度推移を示した記録用紙を差し出す。

村上、それを受け取って、最終記録を見る。

村上 一〇七度…だと…。

野呂川 差し込んだ温度計が割れました。二百度計で計り直した結果です。

村上 …。

野呂川 ここまでくると水冷式でも発火をおさえるのは困難です。なにか手を打たないと…。

村上 いったいどこまで上がるんだ…。

佐野 まだまだ上がりますよ、恐らくね。

野呂川 しかし地質調査では…

佐野 地質調査？ それでほんとうのことがわかるくらいなら、なぜ掘り始める前に高温層の存在がわからなかったんです？ その表をよく見なさい。ほぼ三十メートルごとに二十度ずつ上がっている。あなたがたは高温層の中心に入りつつあるんです。火の玉に向かって掘り進んでいるようなものだ。

野呂川 …。

佐野 また知恵を絞って、打つ手とやらを考えるんですな。そして人夫を実験台にして試してみたらいい。

村上、ゆっくり振り向いて佐野を見る。

佐野のあからさまな当てこすりに最も緊張したのは野呂川のようなだ。

しかし村上は、うっすらと微笑みを浮かべる。

村上 …仰るとおり、打つ手は考え出しますよ、先生。

佐野 …。

佐野は村上の笑みに、寒気を覚えたかのように黙る。

野呂川はじつと村上を見ている。

村上 ノロさん、こんな事故のあとだし、明日いっぱい作業を休止しましょう。仮宿舎のほうは？

野呂川 ほぼ完成しました。人夫たちを全員収容できます。

村上 ではこの機会に移動してしましましょう。こつちには必要最小限の人数だけ残してください。

野呂川 わかりました。…先生はどうされますか。

佐野 (氣をとりなおして) 私は人夫たちの体の面倒を見るのが仕事だ。一緒に移ります。

村上 医療器具を運ぶ人手がいりません。…ノロさん。

野呂川 手配します。先生は荷造りを…。

佐野 …。

佐野、頷いて退場。

野呂川 …殴りかかるかと思つたよ。

村上 そんなことをしている暇はありませんよ。無意味です。

野呂川 腹が据わつたようじゃないか。

村上 わかつたんですよ。

野呂川 なにかがね？

村上 これは戦争なんです。そして戦争には犠牲者はずきものです。戦死者を悼みはしても、戦いをやめることはできない。違いますか？

野呂川 …。

村上 是が非でも勝たなきゃならない。最小限の犠牲でどうすれば勝てるのか、それを考えるのが指揮官の役目だ。

野呂川 …。そうだな。

村上 黒川くんは、埋葬の準備をさせています。片づけてしまわなくては。

野呂川 ムラさんがやるかね？

村上 もちろんです。

野呂川 死体はひどい状態だぞ。

村上 (笑って) それを教えたのはあなたでしょう。現場で死人が出たら、われわれ責任者が手を汚して死者を弔う。その姿を見せることで、人夫たちとの関係は保たれるんだって。そうでしょう？

野呂川 ああ、その通りだ。

村上 今人夫たちの志気を弱めるわけにはいきませんからね。彼らにはまだ仕事が残っている。…行きましょう。

村上、退場。

野呂川、続いて退場。

死者をおくる串鐘のかわりか、長く細く、サイレンが鳴る。

ぞろぞろと、人夫たちが出てくる。

例によって別所と辻。

ふたりは数珠を手に行っている。

別所 (げんなりした様子) あの死に方は御免だな…。

辻 (なぜか目をキラキラさせて、昂揚している) まったく凄いものでアリマス。人間の体とはもろいものでアリマス。自分は、興奮しております。凄い、まったく凄い。

別所 気味の悪い野郎だなあ…。なにをそんなに興奮してやがんだよ。

辻 自分は、自分は、それはもう、自分は、

別所 落ち着け、バカ。なんだよ。自分はどうした。

辻 自分は人の死というものがよくわからないのです。あれこれ想像してみても、その実体は把握できないのです。考えれば考えるほどわからないので、かえってそれに惹かれてしまう自分を優しく包み込むことができないのです。

別所 オマエ、アタマがどうかしてんじゃねえのか。たった今ホトケを見たろうが。あれが死ぬってことだよ。

辻 そうでアリマス。そうなのでアリマス。そうであるからこそ自分にはわからない。アレはなんなのでしよう。アレが人の死というものなら、生きるということはなんなのでアリマシヨウ。下半身ペシャンコになって土に埋もれることが死という概念の具象なら、生という抽象はなにによって具象されるのでアリマシヨウか！ それを思うと自分は、焦りのあまり興奮の極みに達し、自分は、自分という自分は、

別所 コラ、声がでけえ！ 黙れ変態野郎！

辻 …うう。

別所 オマエなあ、その気違いじみたごたくを他のヤツらに聞かれてみる。それでなくてもみんな気が立ってるんだ。ただじゃすまねえぞ。

辻 …ううう。

別所 オメエっていうバカが哲学的なバカだってことは充分わかったから、口を閉じてろ！ いいな！ い、い、な！

辻 …了解したのです。

別所 (ため息)…まったく、変わった野郎だよ…。俺もたいがい物好きだと思ったが、ここじゃまともな部類らしいや。見渡せば変態野郎に人殺しに…つとオ…

戸田、登場。

戸田 …いいから続けなよ。

別所 いや、その、別にあんたのことを、云ったわけじゃあ…

戸田 じゃあ誰のことだい。

別所 そりゃあ、その…ホレ、なんて云ったって会社がいちばんの人殺しさね。そう！ だいたいあの野郎たちや人夫なんぞヒトと思ってねえ…

村上、登場。別所と目が合う。

別所 …こともねえよな！ うん。それなりの誠意ってもんがあらあ。立派。立派なもんよ。

村上、黙って退場。

別所 (大息をつく) 要するに…云いてえことは、だ。…この野郎ひとりが変態ってこった。わかったかコノ！

辻 (別所にポカリとやられて) あた。

新庄、登場。

新庄 おう、戸田。探してたんだ。

戸田 …。

新庄 こんなとき悪いがな、ひとつ頼まれてくれ。佐野先生とここで人手がいるんだ。診察道具やなんかを事務所から運び出すんだが、おめえ、ちよつくら力使^{リキ}ってくれろや。

辻 佐野先生も仮宿舎に移られるのでアリマスカ。

新庄 そうだ。

別所 立派。あの人は立派。

新庄 それから、おめえたちは仮宿舎のほうへ行ってくれや。仮宿舎はトンネルの出口に近いから暑さはそれほどでもねえんだが、それでも岩が熱もつてる。通風口をいくつか開けるんだ。ノロさんが仕切ってる。

別所 あの人も立派。

辻 了解しました。

新庄 んじゃあ、頼んだぞ。

別所、辻、退場。

戸田 (去っていく新庄に) …新庄さん。

新庄 ん？

戸田 …。

新庄 なんだ？ なにか云いてえことでもあるんか？

戸田 …。

新庄 遠慮すんな。云えや。

戸田 …あんときは、済まなかった。

新庄 …。

新庄、まじまじと戸田を見る。

戸田 それだけ、云いたかった。

新庄 …そうか、忘れてたわ。

戸田 …？

新庄、懐からナイフを取り出し、戸田に差し出す。

新庄 おめえんだ。

戸田 …。

新庄 ホレ、取れや。いらんのか？

戸田 なんで…。なんで俺を信用してくれるんだ？

新庄 …。

戸田 あんな真似をした俺をこうやって現場で使ってる。なんでだ？ あんたが組の連中に云ってくれたんだらう？ あんたには連中も一目置いてる。あんたの云うことなら聞くだろう。

新庄 そりゃいささか買いかぶりってもんだが…。

戸田 なんで平気だ？ どうして平気で俺を使う？

新庄 おめえがなにやったんか知らんが、今じゃ、やったことを後悔してる、違うか？

戸田 …。

新庄 答えんでいいよ。とにかくな、戸田。前にも云ったがな…

戸田 …。

新庄 現場のことだけ考えろや。わしもそうする。お互い…

新庄、それまで彼らがいた甲いの場を見やる。

新庄 ああならんようにな。…生き残ることだけ、考えるんだ。

戸田 …。

戸田、黙って新庄の手からナイフを受け取る。

新庄、戸田の肩をひとつ叩き、退場。

戸田、しばしナイフを見つめて、それを仕舞い、退場。

事務所。

岩田、掃除婦のような格好で、こまごまと働いている。

几帳面に神棚の上の埃まで拵ってみている。

岩田 …ふむ。こんなもんか。

戸田が入ってくる。

岩田 (ひとの気配を感じて) 佐野先生、あらかた荷造りは済んだんだが、漏れがな

いか点検して…

戸田 …。

振り向いた岩田と戸田の視線がぶつかる。

ふたりの男のあいだに、張りつめた沈黙が走る。

坑内、仮宿舍。

村上、黒川、野呂川、登場。

村上 竹…？ 竹をどうするんだ。

黒川 ですからですね。竹をこう縦に割りますね。そうして今までこう横に束ねて仕掛けとったダイナマイトを縦一列に並べて、竹で挟みます。仕掛ける穴は、今

度は幅は要らない、細長い穴でええわけです。そこにこの竹をこう差し込む…。

村上 そうか…。竹を通してダイナマイトに熱が伝わるまでには時間がかかる…。

黒川 そうです。

村上 竹はどこから手に入れる？

黒川 (笑って) 裏山によろさん生えてますわ。

村上 …実験してみよう。行けるかもしれない。

黒川 わかりました、ほんならさっそく…！

黒川、退場。

村上 どうだろう。

野呂川 今まで、岩盤の温度を下げることしか考えてなかった。発破と岩の間に断熱性のものを挟むというのは、発想として単純だが、効果的かもしれない。…コロンブスの卵というわけだ。

村上 これがうまくいけば…高温層を突破できるかもしれない…。

事務所。

以下の岩田と戸田の会話の間、坑内では、別所と辻が登場、野呂川の指示で仕事にかかる。(作業そのものは舞台内では行わない)

佐野医師が登場。荷物を置く場所などを打ち合わせる。

辻が寄ってきて例によって虫下しの葉をもらうなどする。

岩田 …。

戸田 …。荷物を…、運ぶように云われた…。

岩田 …。

岩田は黙ったまま、あっちにある、と顎をしゃくる。

戸田 …。

戸田も黙ってそちらに去ろうとする。

岩田 …。戸田。

戸田 …。

岩田 …。少し話がしたい。

戸田 …。

岩田 座らんか。

戸田 …。

岩田は戸田を見ようとはしない。戸田も座ろうとはしない。

吹雪の音だけが聞こえる。

岩田が、食いしばった歯の間から絞り出すように喋り出す。

岩田 …。俺は…おまえを殺しにきた。岩田弦治巡査の仇を、とりにきた。

戸田 …。

岩田 警察官としてではない。その立場ではおまえは一容疑者に過ぎん。捜査本部が証拠固めに手間取ってる間に、おまえは行方をくらました。おまえの足取りをつかんでいるのは俺だけだ。俺はこの山におまえがいることを、誰にも告げずにここへ来た。…なぜかわかるか。

戸田 …。

岩田 逮捕状が出てからでは遅いからだ。…その前に、おまえに会い、この手で、決着をつけたかった。その気持ちは今でも変わらん。だが…

戸田 …。

岩田 最初にトンネルでおまえを見たときに、やってしまえばよかったよ…。戸田。云ってくれ。…おまえがやったんだな？

戸田 …。

岩田 おまえがやったことはわかってる。それはもうお互いはつきりしてることだろう？ だが俺は、それをおまえの口から聞きたい。真実を聞きたい。そうすれば俺は…このまま山を下りる…。警察の手に任せる。

戸田 …。
岩田 云つてくれ。…戸田！

戸田、初めて振り返って戸田を見る。
その表情からはどんな感情も読みとれない。

坑内。
村上と野呂川だけになっている。
別所、登場。

別所 野呂川さん…あの…

野呂川 うん？

別所 通風口、云われたように開けやしたんで。

野呂川 そうか、ご苦労さん。見に行こう。課長、どうします。

村上一緒にいこう。

村上、野呂川、別所、退場。

事務所。

岩田 戸田…。答えてくれ…。

戸田 …。

岩田 答えろ！

戸田は、窓際に歩み寄り、吹雪の強まった外を見ている。
その背中に向かって、仁王立ちに立った岩田警部補が野太い声を張る。

岩田 …戸田幸市！ おまえは昨年…昭和十二年八月、自宅近く、ひとり住まいの某
未亡人宅に押し入り、ナイフで同婦人を脅し、金品を強奪せしめんとしたところ、不審を察知して同宅を訪問した警邏中の岩田弦治巡査と揉み合いになり、同巡査の所持する拳銃を奪い、巡査を射殺。さらに目撃者たる未亡人をも射撃して重傷を負わせしめ、逃走…！

岩田は射るような視線を戸田の背中に当てたまま、告発する。

岩田 以上に間違いないのか！ それが真実なのか！

戸田 …。

岩田 答えるんだ、戸田！

風の音が強まっている。
窓の外に目を向けたまま、戸田がぼつりと呟く。

戸田 …死ななかつたのか、あの女は…。

岩田 …。

戸田 確かに俺は…あのとき、あの女の家に押し入った…。それはほんとうだ。ため込んでるって噂だった。金が…欲しかったんだ。

岩田 …それでおまえはナイフで未亡人を脅し、用意したロープで縛り上げた。
戸田 違う。

岩田 なに？

戸田 それは違う。…あの女を縛ったのは俺じゃねえ。

岩田 どういうことだ…。

戸田 …。

岩田 どういうことだ！

戸田が窓際で振り返る。

戸田 …あんた、ほんとうに知りたいのか…。

岩田、戸田に駆け寄り、その襟首をつかむ。
風の音が高まる。

岩田 …云うんだ！

その瞬間、地鳴りのような音に続いて、巨大な鎌が空を切り裂くような音。
どーん、という轟音。
同時に床に投げ出される戸田と岩田。
暗闇。
いっそう強まる風の音。

坑内。薄暗い。
停電のようだ。

村上、続いて野呂川、登場。

村上 今の音はなんだ！ なにがあったんだ！

佐野医師、登場。

佐野 野呂川さん！ どうしたんです！

野呂川 わかりません。

佐野 ダイナマイトじゃ…

村上 いや、音は外からだ。

黒川、よろよろと走り込んでくる。

黒川 む、村上はん…。

村上 どうした。

黒川、その場にへたり込む。
目を見開いたままの表情は恐怖で凍りついたように見える。

村上 なにがあったんだ。さっきの音はなんだ！

黒川 事務所が…

野呂川 クロ、落ち着いて話せ。事務所がどうしたんだ。

黒川 来て下さい。とにかく来て下さい！

黒川はほとんど子供のように泣き叫んでいる。
村上、黒川の襟首をつかんで引っ張り上げる。

村上 落ち着けっ！ 事務所がどうした！

黒川 事務所が、あり、ありません。

村上 ありませんって…どういことだ、なにを云ってるんだ。
黒川 ないんです…建物ごと…消えてしまいました…。
村上 …。

黒川を除く全員が、坑外に向かって走り出す。
黒川のすすり泣きだけが坑内に響いている。

暗転。

シーン5 告白／貫通／雪融け

鳥の声が聞こえる。朝である。
雪はやんで、晴れ間が出ている。

坑内の仮宿舎。

佐野医師は座ったままうつらうつらと眠りに入っている。
スコップを持った辻、登場し、どきりと座り込む。

佐野 (気配に目覚めて) …ああ。

辻 すみません、起こしてしまったのです。自分は少し休憩でアリマス。

佐野 いや、いいんだ。…どうだい？

辻 幸い明け方から雪がやんでいるので、作業しやすいのです。だいぶ進みました。

佐野 誰か見つかったか？

辻 (首を横に振る) …それはまだでアリマス。もともと昨日は引越ということで、

半分以上の人間がトンネルの方にいたのです。

佐野 残りは事務所にいたわけだ。

辻 はい。二階の休憩所に三十人ほど…。

佐野 それが建物ごと消えた…悪い夢でも見ているようだな。

辻 一階の大部分は資材倉庫で、ここには恐らくだれもいなかったのです。ただ…

佐野 私の診療室は一階だ。

辻 ハイ。岩田刑事と、それに荷物を運びにいった戸田サンが、診療室にいた可能性が高いのです。

佐野 あのと私とは、岩田さんに荷造りを頼んで…なんてことだ…私があんなことを頼まなければ…

辻 先生の責任ではないのです。それに…どうやら一階は残っているようなのです。

佐野 残っている？ そうなのか！

辻 雪の下から瓦礫が出てきました。滅茶苦茶に壊れてはいますが、一階部分だと思われるのです。

佐野 二階から上は…。

辻 それは、影も形もなくなっているのです。

佐野 …。三十人…恐らく絶望だろうな…。

辻 …黒川サンは、だいじょうぶでアリマスカ。

佐野 ああ、鎮静剤が効いたようだ。向こうで眠っているよ。だいぶ取り乱していたからね。

辻 無理もないのです。

佐野 そうだな。…並の神経じゃ、とてもじゃないが耐えられんさ…。

坑外から声が聞こえる。
野呂川のようだ。

野呂川の声 おおい！ いたぞ！ こっちだ！

辻と佐野、顔を見合わせる。

野呂川の声 生きてるぞ！ 手を貸してくれ！ ふたりとも生きてるぞ！

辻と佐野、同時に走り出す、退場。

時間経過。

村上、野呂川、新庄、登場。

村上 そんなことが信じられるか…!

野呂川 しかし、ほかにこれといって説明も見あたりませんな。

村上 ダイナマイトの爆発で吹っ飛んだと考えるほうが、よほど納得がいく。

野呂川 火薬類は無事です。一階の倉庫部分はほとんど無傷のままなんです。

村上 これが雪崩による事故だというなら、建物の二階から上はどこへいったんです。現場付近に埋もれているはずだ。あれから一週間、どんなに雪を掘り返しても、なにひとつ出てこない…。

野呂川 ですから、雪ではなく風にやられたんじゃないかと云うんです。…雪崩のときに、雪の粒に挟まれて圧縮された空気が、爆発に近い現象を起こすことがあるそうです。毎秒千メートル以上の爆風が生じることもあるらしい。…泡と云ったっけ？

新庄 へえ。わしも、話にしか聞いたことはねえですが…。

野呂川 雪が地滑りを起こす底雪崩と違って、その泡雪崩というやつは、とんでもない爆風で山を削ったりするそうです。

村上 秒速千メートルだって…？ 信じられん…。

野呂川 台風の十数倍ですよ。それが、事務所の二階から上の部分を引きちぎって、吹き飛ばしたんじゃないか、と…

村上 つまり、巨大な鎌鼬みたいなものか。

新庄 へえ。生き残った二人のうち、戸田が、あのとき風が鳴るのを聞いたと云ってます。

野呂川 ですからこの付近の雪をいくら掘り返しても、事務所は出てこない…。探すならもつと遠くを探すべきかもしれません。

村上 ……わかった。とにかく少しでも可能性があるのなら、そうしよう。だが…これ以上工事をとめておくわけにはいかない。搜索にあたる人数を数人に絞って、工事を再開する。

野呂川 ……しかし、課長…。

村上 これは決定だ、野呂川さん。さいわい、黒川の考えた竹を使う方式の実験はうまくいった。あれを採用して進めます。

野呂川、新庄の顔を見る。

新庄、首を横に振る。

野呂川 課長、人夫たちが納得しません。せめて行方不明者の三十人を見つけてからでないかと…

村上 ……賃金を五倍にする。もっとも危険な部分、発破の仕掛け作業を担当するものには、そのつど特別手当を出す。

野呂川 ……

村上 その線で、人夫を説得してください。もうすぐ年が明ける。我々に残された時間は僅かだ。…やってください。

野呂川 …わかりました。新さん、行こう。

野呂川、新庄、退場。
暗転。

削岩機の音。
仮宿舍内、診療室。
岩田が横たわっている。
佐野医師登場。

岩田 …ここは…

佐野 気がつきましたね。

岩田 …ああ、佐野先生…

佐野 また助かりましたよ、岩田刑事。

岩田 …なんだか、毎度お馴染みの状態になってしまいましたな…。

佐野 あなたもよくよく悪運の強いからだ。

岩田 なにが起こったんです？

佐野 事務所が建物ごとやられました。一階にいたあなた方だけが助かった。他はいまだに行方不明です。

岩田 ああ、そうか…思い出した…。いまだに…？ あれからどのくらい経ったんです。

佐野 どれくらいと思いますか？

岩田 三日くらいですか？

佐野 三週間です。

岩田 さんしゅうかん？…今回はまたずいぶん長かったな…。

佐野 浦島太郎の気分でしょう。

岩田 …そうか、あのとき、診療室にいて…先生、今、あなた方と云いましたか？

佐野 ええ。あなたともうひとり…

岩田 戸田か。…戸田…そうだ…(途切れた会話を思い出す) 戸田はどこです！

佐野 ああ、まだ動いちゃいけない。あなたは当分、絶対安静です。

岩田 戸田も助かったんですか？

佐野 ええ。ちょうどあなたが彼をかばうように倒れていたんです。偶然でしょうが…。

岩田 …。

佐野 彼はもう仕事に戻ってますよ。

岩田 工事は再開されたんですな。

佐野 …ええ。急ピッチで進んでいます。この一週間で、岩盤の温度がまた上がりました。棋氏一六六度です。

岩田 …ひやく…ろくじゅう…？ それでもまだ仕事を…

佐野 あれはもう、たぶん、誰にもとめられない…。

サイレントシーン。

騒音。発破の音。

人夫たちが往復する。

疲労のあまり倒れる辻を助け起こす別所。
黒川を叱り飛ばし陣頭指揮をとる村上。

時が過ぎていく。

佐野、岩田、退場。
人夫たちもいなくなる。

時間経過。
二月も終わりつつある晴れた日。
尾根。
息を切らせ雪の傾斜を登ってきたらしい野呂川と黒川。
野呂川、双眼鏡を持参している。

黒川 …野呂川はん、ちよつと、ボク、限界ですわ…。
野呂川 …。

黒川 (来し方を振り返って)…一山越えてしまいましたかな。

野呂川 うん。

黒川 こないなトコまでは、いくらなんでも…

野呂川 そうだな。しかし、諦めるわけにもいかんさ。

黒川 …(空を見上げて)…久しぶりに晴れましたな。

野呂川 (双眼鏡を使いながら)…もう二月も終わる。

黒川 空気が澄んでますなあ。ええ気持ちやあ。

野呂川、取り合わずに双眼鏡を覗いている。

黒川 こうしていると、なんや、今までのことが夢みたいでんなあ。工事もあれ以来、あんじよう進んどるし…。

野呂川 温度は相変わらずだがな。

黒川 でも一時より下がりましたがな。工事開始以来上がりっぱなしやったんが、今は百五十二度程度まで下がって、安定してます。これはいい傾向ですわ。高温層の中心を越えたんやと思います。

野呂川 ああ、たぶんな。

黒川 あとひと月もしたら雪融けや。ここまでやったんや、日電も文句はいえへんやろ。…野呂川はん、山下りたら、どないしはります？ ボクは、まず芸者あげて…

野呂川、双眼鏡を覗いたまま、しゃべっている黒川の肩を叩く。

黒川 あ痛。芸者あきまへんか…？

野呂川、黙って顎で方角を示す。

黒川 …？

野呂川 ずっと向こうに川が見えるだろう。

黒川 へ、へえ。キラキラしてまんな…。

野呂川 まだ凍ってるんだ。その、右手の、広くなった河原のあたりを見ろ…

黒川 …(目を凝らす)…あッ。あれは…あの灰色の塊は…

野呂川 …コンクリートの残骸だ。(双眼鏡から目を離す)…発見した。課長に知らせろ…。

黒川 は、はいっ。

黒川、あたふたと退場。

野呂川 信じられん…あんなところまで飛ばされたのか…

野呂川の退場に、弔鐘がわりのサイレンがオーバーラップする。
 仮宿舎。
 人夫たち、新庄、戸田、岩田、佐野、黙りこくって登場。
 それぞれ座り込んだり、思い思いの姿勢。
 村上、登場。

村上 どうしたんだ、みんな。作業を開始してくれ。

人々は黙っている。

村上 あの三十人は、気の毒だった。誠意を尽くして、遺体は回収した。彼らの犠牲を無駄にしないためにも、俺たちは作業を続けなくちゃいけない。そうだろう？

人々は黙っている。

村上 どうしたんだ！ ここまでやってきたのはなんのためだ！ 難しい部分は乗り切ったんだ。あと少しなんだぞ！

別所 俺たちってなあ、誰のこつたい？

村上 …。

別所 俺ら人夫が俺たちってつたら、そりゃ人夫のことだが…あんたの云う俺たちってのは、いったい誰のこつたい？

村上 この工事を遂行してきたみんなだ！ 不可能に挑戦し、山と戦ってきた全員のことだ！

別所 俺らはそんなつまんねえもんには挑戦したつもりはねえよ。あの三十人もな。

村上 …。

別所 ここまでやってきたのはなんのためかって？ 賃金を三倍、五倍と釣り上げて俺たちを使ってきたあんたが、今更そんなこと聞くのかい！

村上 …。

別所 ちつとばかり疲れちまったんだよ。

辻 自分は…

村上 …。

辻 自分は、相変わらず人の死というものがわからないのでアリマスが、あの三十人の屍を見たとき、どうしてでアリマシヨウ、自分は感動したのであります。自分は恐怖しておりました。恐怖しながら自分は、あの圧倒的な無意味さに感動しておりました。自分は少しだけわかったのでアリマス。どんな形を取っていても、人の死は無意味なものではないか、いや、死というものは意味の終わりを意味しているのか、そもそも生には意味があるのか、自分は、自分という自分、

辻。(辻を優しく抑える)…もういい。わかったよ。…もういいんだ。

村上 …聞いてくれ。この工事は、黒部第三発電所の完成は、日本のための大事業なんだ。日本中がこのエネルギーを、ここから生み出される電力を待っているんだ。決して企業としての意地だけじゃない。金儲けのためでもない。ここは戦場なんだ。俺たちはみんな、日本のために戦っているんだ！

佐野 違う。…あんたはただ掘りたいだけだ。
 村上 …。

佐野 自然との戦いにとりつかれているだけだ。あんたの云うとおりここは戦場だよ。だが戦う理由は人それぞれだ。少なくともあんたとは違う。あんたは戦いのために戦っているだけだ。金のためでも名譽のためでも、ましてや国のためでもない。…そうだろう。

佐野、村上の胸ぐらをつかんで、壁に押しつける。

佐野 そうだろう！

村上 ……

村上、黙って佐野を睨んでいる。
佐野、手を離す。

村上 ……。そうかも知れん。…それがなんだ？ それのどこが悪いんだ！

佐野 ……

村上 ……金のためか。それならそれでいい。たった今、切端まで行って発破を仕掛け、点火してきた奴に八倍…十倍の手当を出す！ それでも行かないか！

吠える村上から全員が目を逸らしている。

村上 どうした！ おまえたちは金が欲しいんじゃないのか！ 十倍だぞ！ どうなんだ！

戸田 ……俺が行くよ。

全員が戸田を見る。

戸田 俺が行くよ。いいかい？ 課長さん。

村上 行ってくれるか。

戸田 ああ。金は十倍だ。忘れないように頼むぜ。

村上 もちろんだ。

戸田 おまえさんの云うとおりだ。

戸田は辻に言っているようだ。

戸田 死ぬことに意味があるとすりゃあ、生き残ったヤツらが、それを好きに考えりゃいいってことだよ。

戸田、岩田に一瞥をくれて、退場。
黙っていた新庄が立ち上がる。

新庄 ……どうもあいつひとりじゃ危なっかしいでな。

新庄、戸田の後を追って退場。

別所 しゃあねえなあ…。辻よ。

辻 ハイ。

別所 もう一稼ぎすつか？

辻 ハイ。

別所 おめえも、しよせん金に目がくらんだ馬鹿野郎か。
辻 くらんでおりますが、でも…はぐれてはいない気がします。

別所 行くか。

別所、退場。
辻、佐野のところへ。

佐野 ああ…。

佐野、ポケットから薬を出そうとするが、
辻が先に自分のポケットから薬を出して差し出す。

辻 余ったのでアリマス。…では。

辻、退場。

岩田、なにごとか考えているが、黙って退場。
削岩機の音が響き始める。
佐野、受け取った薬をポケットにしまい、退場。

野呂川、登場。
立ち尽くす村上に話しかける。

野呂川 …ああいうときはな、ムラさん、演説しちゃだめだ。そつとひとりだけ呼んで話をつけてしまうんだ。ひとりが仕事を始めれば、全員が戻ってくる。人夫つてのはそういうもんだ。覚えとくといい。…俺の最後の忠告だ。

村上 最後？

野呂川 この冬が過ぎたら、潮時だと思っていたんだ。あとは、あんたや、クロのよ
うな若いのが引っ張っていけばいい。

村上 …。ノロさん、私は…。

野呂川 間違っていたかって云うのか？ そいつを決めるほど俺は偉くないよ。

野呂川、退場。
村上、じっと立って、削岩機の響きを聞いている。

坑内。
立ち働く人夫たち。
やがて警告の手動サイレンが鳴る。

新庄 退避だ！ 発破を掛けるぞ！ 全員退避！

辻、別所、退場。
戸田は動かない。

戸田 …。

新庄 戸田！ どうした、早く行け！

戸田 新庄さん。

新庄 なんだ。

戸田 俺にやらせてくれ。

新庄 …。

戸田 俺に、点火をやらせてくれ。

新庄 戸田…おめえ…

戸田 だいじょうぶだ、莫迦なことは考えてねえ。

新庄 …。

戸田 このクソ熱い穴んなかで毎日這いずってきたんだ。一回くらい、自分の手でこの岩の塊を吹き飛ばしてみてえんだ。

新庄 …。

戸田 頼むよ。

新庄 よし、わかった…。手早くやれよ。今、岩盤温度は一五七度だ。竹の鞘もそう長くは保たねえ！

戸田 わかった！

新庄 待ってるぞ、戸田。

新庄、退場。

戸田、切端を振り返り、岩の壁を見渡す。
背後に、人の気配がする。

岩田警部である。

岩田 戸田ッ！

戸田 刑事さんか。(笑い) くると思ってたよ…。

岩田 これが最後だ。聞かせろ、本当のことを！

戸田は、岩盤を背にして岩田と向き合っている。

戸田 ゆっくりはしてられないぜ、岩田さん。早いとこ点火して逃げねえと、こいつはもうすぐ自然発火する。

岩田 それなら、とつとつしゃべるんだな。

戸田 …あんたを刺して逃げることもできるんだぜ。こいつでな。死体は木っ端微塵だ。

戸田、ナイフを見せる。

岩田 おまえの好きにしろ。

戸田 覚悟はできてるってわけかい。

岩田、戸田に近づく。

戸田のナイフが喉元にくつつく距離まで、岩田は歩いてくる。

岩田 …。

戸田 …あんたを刺しても、なにも変わらん。無意味だな…。

戸田、ナイフを捨てる。

岩田、素早く手錠を取り出して、戸田の手首に掛ける。

戸田 …。

岩田、手錠の一方を自分の手首に掛ける。

戸田 なんの真似だ…。

岩田 これで俺とおまえは一蓮托生だ。おまえがしゃべるまで俺はここを動かん。そのうちこいつが爆発するだろう。

戸田 あんた、俺と心中するつもりか。

岩田 おまえがしゃべらなきゃ、そうなるな。

戸田 ……

岩田 ゆっくりはしてられんぞ、戸田。早く決めることだ。

戸田と岩田の視線がぶつかりあう。

戸田 ……あのとき…

岩田 ……

戸田 おれがあの子のところに行ったとき、女はひとりじゃなかった。…あの巡査が…あんたのオヤジが、すでにそこにいた…

岩田 ……

戸田 女は縛られてた。縛ったのは…俺じゃねえ…たぶん…

岩田 ……貴様…でたらめを云うな！

戸田 ……でたらめ？ あんたはそう思うのか？ どうとも勝手に思えばいいさ…

岩田 ……

戸田 撃ったのは俺だ。あんたのオヤジを殺したのは俺だ。それが事実だよ。

岩田 ……

戸田 だが先に撃とうとしたのはあんたのオヤジのほうだ。

岩田 なぜだ…

戸田 俺が、見ちゃいけないものを見たからだろう。机の上には、札と、絵の具や絵筆が…転がってた…あんたのオヤジは、あの女をモデルに、絵を描いてたのさ…女を縛ってな。あぶな絵ってやつだ。趣味だったんだろうさ。

岩田 でたらめを…そんなものは現場にはなかった！

戸田 あんたのオヤジは即死だったか？

岩田 ……

戸田 瀕死の状態でも、どうしても隠さなきゃならないものもある。札は俺がとった。あの巡査は…制服を着てたが…いいか…上だけだったよ。

岩田、その意味を解すると同時に戸田を殴りつける。
倒れる戸田、それに引きずられて岩田も倒れる。

戸田 調べてみたらどうだい、もう一度。ええ？ あの家のどこかに…

岩田 云うな！ それ以上…

戸田 あんたが聞きたがったんだ！

戸田、逆に岩田の胸ぐらをつかんで吠える。

戸田 ……もみ合ってるうちに弾が出ちゃった。それが女に当たった。だからあの女を撃ったのは正確には俺じゃねえ。俺たちだ。それからはあんたの云った通りさ。俺は逆上してた。やつとのこととでピストルを取り上げて、なにも考えずに、撃った。あんたのオヤジを……そして逃げた。

岩田、戸田の捨てたナイフを取り上げて、戸田に突きつける。

岩田 そんな話を俺が信じると思うのか…

戸田 信じる信じないはあんたの勝手だ。

岩田 ……

戸田 そんなもの使わなくても、もうじき、こいつが爆発する。竹の焼けるにおいがするだろう？ もうすぐだぜ。

岩田 ……

戸田 どうするんだ？ 早く決めてくれ。俺は全部しゃべったぜ。あんたの云うとおりに、全部。…意味は勝手に考えるんだな。

岩田 ……

戸田 ……どうするんだ…ええ？…どうするんだよ！

じつと動かないふたり。

岩田、戸田を殴る。

倒れた戸田を引き起こして、叫ぶ。

岩田 走れッ！

岩田と戸田、走り出す。退場。

ほとんど同時に、爆音。

その爆音に、新庄、別所、辻、佐野、走り出てくる。

爆音のこだまが消えていく。

戸田と岩田は戻ってこない。

四人は、凍りついたように、黙って坑道の奥を見つめている。

別所 ……おい！

別所が坑道に動く人影を見つける。

岩田が、戸田に肩を貸すようにして、よろよろと歩いてくる。

二人の生還者を取り囲む四人。

崩れ落ちるように倒れる岩田と戸田を、

四人が支えながら、仮宿舍へと戻っていく。

暗転。

雪が落ちて枝を鳴らす音。

三月末、晴天。聞き慣れぬ鳥の声。春の鳥だろう。

仮宿舍。日電・飯室と村上。

飯室 (記録を見ながら) 驚きましたな。

村上 ……

飯室 予定に追いついたというわけですか…。たった一冬で…。

村上 ……

飯室 いや、感服しました。去年の失礼をお詫びします。さすが滝川組だ。さっそく本社に具申しますよ。滝川組のまま工事を続行するようにね。

村上 そうですか。

飯室 どうしました。顔色が悪いな。

村上 ……警察の取り調べがあるんで、これで。

飯室 そうですか…。まあ、死者の数も尋常じゃない。仕方ないですな。だいじょうぶ。ちゃんと手は打ちます。

村上
…。

飯室 あなたのような優秀な現場指揮官を手放すわけにいきませんからね。

村上
…。

飯室 いや、これでだいぶ見通しが明るくなりました。ご存じですか、同盟国ドイツがソ連に宣戦布告しましたよ。我が国も、いよいよ臨戦態勢です。この仕事は国家百年の大計ですよ。陸軍省も期待しているんです。

村上
飯室さん。

飯室
はい。

村上 あなたはなんのために…

飯室
はあ？

村上 …いや、なんでもありません。忘れて下さい。

飯室
ああ、そうだ。

村上
なんです。

飯室 いい知らせですよ。今回、事故の犠牲者に対して、陸軍省の働きかけで、天皇陛下から見舞金が出されることになっています。死者ひとりにつき二十五円ですがね。

村上
…。

飯室 これで、工事中止を求める世論が沈静化することは間違いありません。我々もぐっとやりやすくなるというものです。日電でも特別弔慰金を出すことを検討中です。

村上
… 飯室さん、そろそろ…

飯室 ああ、では、また後ほど…警察で下手なことを云ってつけこまれないように…。とにかく、自然の災害は予測がつかないものだとしても云い続けておくことです。それじゃ。

飯室、退場。

村上
…。

村上、坑外に出る。空が澄んでいる。

暗いトンネルを振り返る。

発破の音、水の迸る音、人夫たちの怒鳴り声、

夜通し続く吹雪の音が、混じり合って遠くから聞こえてくるようだ。

村上は、歩き出した。

暗転。

シーン6 出所／差し入れ／冬の終わり

一九七〇年。東京拘置所。
戸田老人と囚人たち。

戸田 翌昭和十五年、黒部第三発電所は完成した…。その電力から生み出された戦闘機が真珠湾を攻撃したのが、その翌年じゃった。太平洋戦争が始まったあの年、わしは警察に自首した…。

囚人たち …。

戸田 以来、五十数年…あの冬をともに生きた者たちとは、一度も会ってはおらん。ずつと…この壁の中にわしはいた…。

囚人1 俺、黒部ダムにいったことありますよ…。

戸田 …。

囚人1 大学のゼミ旅行で行ったんです。キレイだったな。

囚人2 こんなときになに云ってんだおまえ。

囚人1 …。

戸田 そうか…きれいだったか…。

囚人たち、黙って戸田を見ている。

監獄のドアが軋む音がする。

囚人たち、はっとしてそちらを見る。

戸田が立ち上がる。

囚人2 戸田さん。

囚人3 お元気で…

囚人1 …おい。

囚人2 うん。

囚人たち、戸田を残して退場。

戸田は前を向いたまま、動かない。

やがて、一歩づつ足を踏み出す。

そのとき、囚人1が、戻ってくる。

囚人1 戸田さん！

戸田 …。

囚人1 今、看守が来て、これを戸田さんにつて…差し入れだそうです。

囚人1は、小さな包みを戸田に渡す。

囚人1 看守がびっくりしてましたよ。戸田さんに差し入れなんて、初めてだって…

なんだか間の悪い奴ですね、こんなタイミングで差し入れなんて。

戸田 …。

囚人1 看守の話じゃ、差し入れた男は岩田と名乗ったそうです。

戸田 いわた…ど、どんな…

囚人1 眼鏡を掛けた若い男だったそうですよ。そして伝言を残したそうです。十年前に亡くなった父から預かったものだが、今日ここに持ってきて、戸田という人に渡すように云われていた、と。

戸田 …。

戸田、震える手で包みを開く。
小さな物体が戸田の手のひらの上にかかる。
それは、古びて硬くなった、使いさしの白い絵の具のチューブである。
戸田はそれをじっと見つめる。

囚人1 …絵の具ですか、それ。

戸田 …。

囚人1 変わった差し入れですね。

戸田 …。

囚人1 じゃあ、戸田さん、体にお気をつけて。これから冬も本番です。寒くなりま
すから。

戸田 …。

囚人1、退場。

戸田 いや…これで…

戸田、見えない空を見上げる。

戸田 …ようやく、冬が終わったようだ。

見えない空を見上げて立ち尽くす戸田。
風の音が聞こえる。

幕。

1997年脱稿